

2016年1月5日

みずほディーラーズアイ (2016年1月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 118.00 ~ 123.00

国際為替部 為替営業第二チーム 矢野 正東

■ 先月の為替相場

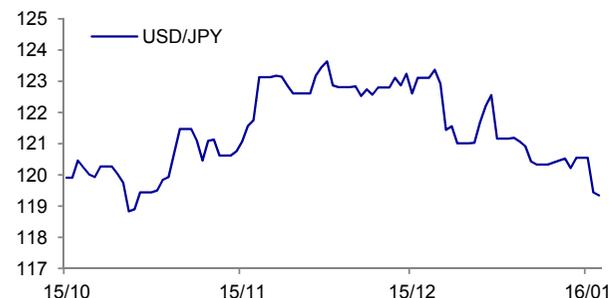
12月のドル/円相場は、「上値の重さが意識される中、狭いレンジでの推移」となった。
 月初123円台前半で取引を開始した後、「本邦年金運用機関が一部投資について為替変動リスクのヘッジを開始した」との米紙報道や米11月ISM製造業景気指数が3年ぶりに50を下回る予想外の悪化となったことを受けて122円台まで下落。しかし、2日公表の米11月ADP雇用統計の良好な結果やイエレンFRB議長の講演を受けた12月米利上げ観測の高まりから月中高値となる123.68円まで反発した。翌3日、注目されたECB理事会が開催され追加金融緩和が発表されるも、市場の期待を下回る内容だったことからユーロの対ドルでの買い戻しが加速。更に、米11月ISM非製造業景気指数の低調な結果も重なり122.30円まで反落した。ただ、この水準では押し目買いの動きが見られた他、4日公表の米11月雇用統計も市場予想を上回る結果となったこともあり、再び123円台まで水準を切り返した。
 月央にかけては「値動きの荒い展開」となった。原油先物相場の大幅下落を受けて株式相場が軟調推移となると、9日にはドル/円の節目と見られていた122.50円を下抜け、ストップロスを巻き込みながら122円割れまで下落。一旦は原油先物相場の反発を好感し122円台まで反発する場面も見られたが、地合い改善には繋がらず、14日には120.35円まで水準を切り下げた。その後、16日(米国時間)に当月最大の注目イベントであったFOMCが開催され、大方の予想通りFF金利誘導目標の0.25%引き上げが決定された。この結果を受けてドル/円は買い優勢となり、17日には一時122.88円まで上昇した。しかし、翌18日に開催された日銀金融政策決定会合が波乱材料となり乱高下。「マネタリーベースが年間約80兆円に相当するペースで増加するよう調節」という現行方針は据え置かれたものの、新たに「量的・質的金融緩和を補完するための諸措置」が発表されると、このヘッドラインを受けてドル/円相場は122.50円台から123.59円まで1円超の急騰を見せた。しかし、内容があくまで補完的なものに留まっていたことが判明すると一転急落。更に、日経平均株価が大幅下落に転じたことも下押し材料となり121.82円まで水準を切り下げた。
 その後、月末にかけては「上値の重い展開」が続いた。クリスマスホリデーで市場参加者が減少し市場流動性が低下する中、原油相場や日経平均株価の軟調推移が嫌気された。25日に月中最安値となる120.05円まで下落すると、年内最終日まで戻りは鈍く、120.30円で越年となった。

■ 今月の見通し

今年のドル/円相場は「方向感を探る展開」を予想する。2015年のドル/円相場を振り返ると、スイスショック、ギリシャ債務問題、中国発グローバル株安の進行などマーケットを震撼させる大きなイベントが多く見られた。しかし、年間値幅を見てみると、1973年に変動相場制に移行して以来最小(10.01円)に留まっている。特に年後半は「米利上げ」を主要テーマとして同国景気指標や金融当局者の発言を消化しながら水準を切り上げたものの、12月に9年半ぶりとなる利上げが敢行された際には、市場参加者の目線は既に「利上げの有無」から「利上げのペース」に移っていたため、その後のマーケットへの影響は限定的となっている。
 前回FOMCにおいては、先行きの追加利上げはあくまで「データ次第」で「緩やかなペース」であることが確認され、2016年は大幅なインフレ上昇が無くとも年4回程度の利上げは可能との見方が示された。ただ、FF金利先物を見てみると2~3回の追加利上げを織り込むに留まっていることから、市場参加者の多くはこのFOMCメンバーの見通しに少なからず懐疑心を抱いているように見受けられる。このような状況下、今月のドル/円相場は米経済指標を消化しながら、この「見通しに対するギャップ」を調整していくこととなる。8日発表の12月米雇用統計をはじめ同国経済指標の改善が確認されれば、一段と利上げの織り込みが進み、ドル/円相場の上昇が期待される。しかし、3月FOMCにおける追加利上げは約5割と相応に織り込まれていることから現行水準からの上昇余地は限定的と見ている。他方、米経済指標の悪化や原油等商品市況の悪化が一段と加速すれば、3月追加利上げ期待の後退からドル/円相場の下落も想定される。ただ、2015年には過去最大・最速ペースで買い越しが続いた対外証券投資が、その迫力こそ衰えても国内の金利環境を踏まえれば引き続き継続する状況と見られることはドル/円相場のサポート材料となる。また、市場参加者が予想し得なかった日銀の「量的・質的緩和を補完するための諸措置」によって、国内では将来的な追加緩和の思惑が高まっていることも心理的なサポート材料となる。
 現状の為替市場では円安/円高の見通しに大きな偏りがあるようには見受けられない「コンセンサスの無い」状態であることから、前月同様「米追加利上げのペース」をテーマに方向感を探ることとなる。

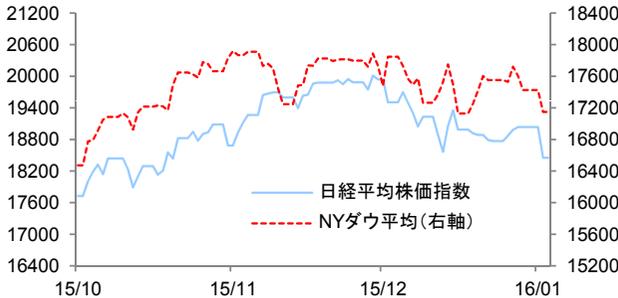
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/2	米ISM製造業	11月	50.5	48.6	50.1
12/3	米ISM非製造業	11月	58.0	55.9	59.1
12/4	米非農業部門雇用者数	11月	200K	211K	298K
12/4	米失業率	11月	5.0%	5.0%	5.0%
12/14	日銀短観(大企業製造業)	4Q	11	12	12
12/16	米FOMC政策金利	12月	0.50%	0.50%	0.25%
12/18	日銀金融政策決定会合	12月	「量的・質的金融緩和を補完するための諸措置」発表		
12/22	米GDP(確定値)	3Q	1.9%	2.0%	2.1%
12/25	日全国CPI	11月	0.3%	0.3%	0.3%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル・ブル (4名、117.50~125.00、中心117.75~123.00)

加藤	117.50 ~ 125.00	米国利上げのペースがメインテーマとなろう。年初は市場の薄い状況下で円高に振れる可能性もあろうが基調としてのドル高方向に変化はないであろう。
矢野	118.00 ~ 123.00	引き続き「米利上げのペース」がテーマ。今後の利上げペースの見通しについてFOMCメンバーと市場参加者との間にギャップが見られるため米雇用統計などデータを消化しながら方向感を探る展開を予想。
高田	117.50 ~ 123.00	FRBが利上げ姿勢を維持しており基本的には良好な米経済指標に応じてドル高相場が予想される。ただし、原油安や株安などのリスクオフムードが高まる局面では一時的に円高に振れやすいと思われるが限定的であろう。
西谷	118.00 ~ 123.00	原油価格下落に伴う急激なリスクオフ相場には警戒が必要だが足許の原油相場は一旦下げ止まりの様相を見せており、センチメントとしては過度に悲観的な状況ではないと考える。米国の経済指標に一喜一憂する展開が考えられるが、米経済が堅調であることを前提に、緩やかに上昇する値動きを想定する。

■ドル・ベア (7名、113.50~122.00、中心115.00~122.00)

藤崎	115.00 ~ 122.00	FRBの追加利上げは相場に織り込み済みだが、年4回の利上げは疑問。日銀の追加緩和に限界感が漂う中、日米金利差に着目した相場には一旦達成感あり。実需筋のヘッジ積み増し、投機筋のドルポジションの手仕舞いにドル下押しを予想。
山下	114.00 ~ 121.00	12月FOMCを通過したことで次回利上げ時期とされる3月までは米国金融政策は為替のメインテーマとはならないであろう。日銀の緩和政策も小出しとなりおり限界を感じる。ドル買い・円売りトレンドは一旦終息したと考える。
佐藤	116.00 ~ 122.00	米12月雇用統計が良好な結果となったとしても単月ベースであり、3月開催のFOMC(イエレン議長の記事会見が予定されている会合)までに発表される経済指標を見極めたいとの思惑から上値追いの展開にはならないだろう。むしろ、指標悪化時のネガティブサプライズに伴う下落リスクの方に留意する必要あり。
西島	115.00 ~ 121.00	長引く原油安、中国景気減速懸念に加え、世界各地でテロ発生の可能性が指摘され地政学リスクへの警戒が怠れない状況下、リスク回避の円買いフローがドル円の上伸に待ったをかける展開。米次回利上げは3月以降であり米金利上昇を背景とするドル高は期待薄。
尾身	113.50 ~ 120.50	2015年テーマ「米利上げ開始を視野に入れたドル高」相場巻き戻しの気配。FOMC通過後2円近くレベルを切り下げたが、120円割れには至らなかった。今月はドル売りの継続に加え、120円を割り込むような相場展開が見られれば社内レートを意識した実需筋のドル売りフローから相場は下押しされるだろう。
下山	115.00 ~ 122.00	利上げ期待を背景にドル自体は強含むとしても、追加緩和期待がかなり剥落している印象の円を売る理由は乏しいと考える。市場参加者がドル円のトレードを手控える中で経常黒字を背景とした円買いがドル円相場を下押しし、その流れに乗る形で投機筋が次第にドル円のショートポジションを構築すると予想する。
森谷	116.00 ~ 122.00	12月FOMCでの利上げ決定以降、今年以降の利上げペースに注目が集まっているが、ドットチャートで示唆された年4回の利上げペースについては懐疑的な市場参加者が相応にいると想定される。今月の経済指標のみで次回利上げ期待が大きく高まってくるとは考えづらく上値の重い推移を予想する。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0300 ~ 1.1000
EUR/JPY 126.00 ~ 132.00

国際為替部 為替営業第二チーム 山下 智子

■ 先月の為替相場

12月のユーロ相場はECB追加緩和にもかかわらず底堅い展開となった。月初1.05半ばで始まったユーロ/ドルは、独11月失業率が史上最低となったことや独11月製造業PMIの良好な結果から1.06台前半まで上昇し、米11月ISM製造業景気指数の悪化を受けたドル売りも相俟って上昇が続いた。2日発表された米11月ADP雇用統計は好調な結果やイエレンFRB議長講演を受けた米利上げ期待からドル買いが進むと、1.05台半ばまで値を下げたが、米株の下落を背景にドル売り優勢地合いになると1.06台前半に回復した。3日のECB理事会では、追加緩和発表直後こそ週安値となる1.0523まで下落するも、内容が市場予想を大幅に下回るものとなったため買い戻し優勢となり1.06台後半まで上昇。その後も米11月ISM非製造業景気指数の冴えない結果を受けたドル売りも重なり一時1.0981まで急伸するも、1.10台を目前にして売りが散見され、1.0900を割り込む展開となった。翌週1.08台後半でオープンしたユーロ/ドルは、ドル買い優勢地合いに一時週安値となる1.0796をつけるも、その後は原油安を背景に米金利が低下するとドル売りの勢いが強まり、1.08台後半まで回復。原油価格の更なる下落を受けて世界的な株安からリスク回避姿勢が強まると、9日には1.1044まで上昇した。翌週1.09台後半でオープンしたユーロ/ドルは、ドラッグECB総裁が現行の景気刺激措置がインフレ率を遅延なく押し上げると発言したことを受けて1.10台前半まで上昇し、15日には一時1.1060まで上昇したが、リスク回避姿勢が強まる中で1.09台後半まで反落。注目された16日のFOMCの結果を受けてドル買いが強まり、1.08台後半まで値を下げるも、イエレン議長の会見で慎重姿勢が示されると1.10台前半まで急伸する場面も見られた。17日には独12月Ifo企業景況感指数の市場予想を下回る結果や欧米金融政策格差が意識されてユーロ売りが強まると、ドル買い地合いも継続する状況下、一時週安値となる1.0802まで下落した。クリスマス休暇週初は1.08台後半でオープン。週末に開催されたスペイン議会選挙の結果を受けてユーロ売りが強まると一時1.0850をつけるも、その後は米11月シカゴ連銀全米活動指数・米11月中古住宅販売の大幅な悪化を背景にドル売りが強まり、ユーロ/ドルは1.0984まで上昇。その後は1.10を意識した売りに押され1.08台後半まで下落した。年内最終週の28日は1.09台半ばでユーロ/ドルはオープン。節目の1.1000を試す展開も、テロ関連のニュースに押し戻され、29日には1.0900割れ。月末要因の欧州勢からの買いに1.09台を一時回復するも上値は限定的で、2015年最終日は1.08台半ばで引けた。

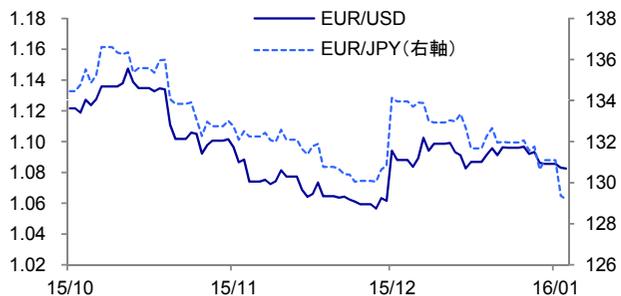
■ 今月の見通し

今月のユーロ相場は対他通貨に対して弱含む展開を予想する。注目された12月開催のECB理事会では資産購入プログラムの期限を少なくとも17年3月迄(6か月の期間延長)とし、資産購入対象の拡大・元本支払い額の再投資を決定したものの、中銀預金金利は10bp引き下げ(▲0.3%)と市場予想を下回ったために、失望感からユーロが買い戻される結果となった。但し、これは市場の期待から過剰なユーロショートポジションが積み上がってしまったことが原因でありECB金融政策の方向性を変えるものではない。米国が正常化プロセスに突入したことでドル高シナリオが明確となり、ECBが緩和をせずともユーロ安になりやすい地合いとなっているほか、秋以降のユーロ圏経済の持ち直しによりドイツなどからの大胆な追加緩和策に反対する意見に配慮した結果と考える。

フランスのテロ事件に端を発した地政学的リスクは一層高まっており、ユーロ圏域への渡航中止による観光収入の落ち込みや消費心理の冷え込みが懸念される。他方、中国ショックや原油市場の混乱の最中にドラッグECB総裁の追加緩和姿勢が強んだことから見てとれるように、ECBが今後の金融政策において、この両面を注視していることは疑いようもない。中国経済は夏の人民元ショック以降、政府の執拗な景気テコ入れ政策により落ち着きを払っているように見えるが、上海株の不安定さは今なお続いており、ハード経済指標の改善の信憑性には疑念が残る。原油市場においても、サウジアラビアを始めとしたOPEC加盟国は原油価格下落が世界景気に好影響を及ぼせば供給過剰は数年で解消されるとの思惑などから減産を見送っており、OPEC加盟国以外の産油国はシェア確保のために増産を続けるという状況は今後も解消されにくいであろう。然るに、テロ事件などの影響による内需の落ち込みや中国引いては新興国経済の減速という外部環境の悪化によるユーロ圏景気下振れ、原油価格続落によるインフレ率低下とECBの更なる緩和に向けたカードは揃いつつある。もちろん米国の正常化プロセスが頓挫してしまった場合のドル売りリスクは残存するが、次回の米国利上げとされている3月までにはまだ猶予があり、今月は米国金融政策が市場のメインテーマとならず、ECB理事会後のユーロショートの巻き返しにより過剰なポジションの傾きが解消された今、次の追加緩和に向けて新たなユーロショートの構築には絶好のレベルにあると考える。中国経済・原油市況の動向を睨みつつ、今後のECB金融政策を占う意味でも、21日のユーロ圏12月消費者物価指数・同日に開催されるECB理事会での結果に注目したい。

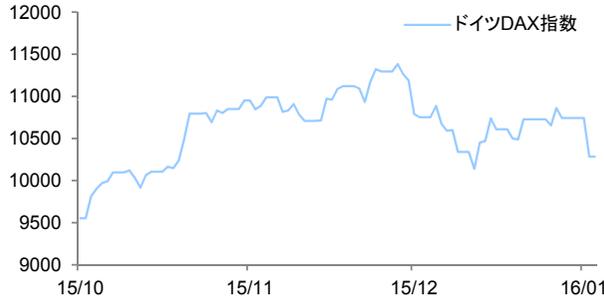
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	欧 失業率	11月	10.8%	10.7%	10.8%
12/2	欧 PPI (前年比)	10月	-3.2%	-3.1%	-3.1%
12/3	欧 小売売上高 (前年比)	10月	2.6%	2.5%	2.9%
12/8	欧 GDP (前年比)	3Q	1.6%	1.6%	1.6%
12/16	欧 製造業PMI (速報値)	12月	52.8	53.1	52.8
12/16	欧 サービス業PMI (速報値)	12月	54.0	53.9	54.1
12/16	欧 CPI (前年比)	11月	0.1%	0.2%	0.1%
12/18	欧 経常収支 (季調前)	10月	-	25.9B	33.1B
12/30	欧 消費者信頼感・確報値	12月	-5.9%	-5.7%	-5.9%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ・ブル (2名、1.0700 ~ 1.1500、中心1.0750 ~ 1.1450)

藤崎	1.0700 ~ 1.1500	ECBによる追加緩和は内部でのコンセンサスが困難。米利上げの継続性に疑問が残る中、ユーロショートポジションの手仕舞いによるユーロ反発を予想。投機筋のショートポジションが依然として高水準であり、相当規模のショートカバーが起きる可能性あり。
尾身	1.0800 ~ 1.1400	FRB利上げを追いかけた”ドル高”、ECB緩和期待に引きづられた”ユーロ安”相場に巻き戻しの兆し。先月会合にて緩和決定した後からユーロ相場は上昇基調となり、レベルを切り上げている。材料出尽くしから巻き戻しを避るテーマには欠け、市場には相場参加者が戻る為、調整の継続が自然な流れとなるだろう。

■ ユーロ・ベア (9名、1.0200 ~ 1.1100、中心1.0500 ~ 1.1000)

加藤	1.0200 ~ 1.1000	ECBによる非伝統的な量的緩和は始まったばかりであって、12月の追加緩和をもって終了とは考えづらい。米国との相対的格差を考えるとユーロがブル転ずるとは思えない。今年もユーロのバリエティライが一つのスローガンになるだろう。
山下	1.0300 ~ 1.1000	米国正常化プロセスによるドル高・ユーロ安恩恵から12月ECB追加緩和は小規模なものとなったが、米国頼みにも限りはある。原油安に歯止めが効かない状況下、インフレ率低下も避けられず、ECBの追加緩和は必至。ユーロは下値を試す展開を予想。
矢野	1.0500 ~ 1.1000	「ECBによる追加金融緩和vs米追加利上げ」という構図は不変。12月の追加緩和は期待外れとなったことから反発するも更なる緩和期待から上値は重い。また原油安が期待インフレ率の低下を連想させることもユーロ相場の重石となろう。
高田	1.0600 ~ 1.1050	軟調を予想。原油安などを背景に期待インフレ率の低迷を受けたECBの追加緩和期待からユーロ売り相場が予想される。とはいえユーロ売りポジションも相応に積み上がっており下値は限定的であろう。
佐藤	1.0500 ~ 1.1100	原油価格の下落を背景に消費者物価指数に低下圧力がかかり、ECBによる追加緩和期待が高まりやすい。ただ、12月開催の理事会では追加緩和の内容が市場の期待に応えられなかったことから、実際はECBによる大規模緩和は期待できず、ユーロの下落は緩やかに留まりそうだ。
西島	1.0500 ~ 1.1050	ECB緩和策による金利低下圧力から積極的なユーロ買いは期待し難いことに加え、原油安の影響がユーロ圏へじわじわと及び寄り域内の景気減速が気にかかる。ユーロは上値の重い相場展開が続くそう。
下山	1.0500 ~ 1.1000	ユーロが底堅さを見せつつある印象はあるが、それでも追加緩和に積極的なユーロと利上げに向かうドルとでは金融政策格差を受けたユーロ売り/ドル買いが未だ優勢だろう。原油価格が回復しているとも言いきれず、ECBによる追加緩和観測はくすぶり続けると思われる。引き続きユーロは下目線を継続する。
西谷	1.0500 ~ 1.1000	先月のECB緩和策は中途半端なものというイメージは拭えないものの、FRBが引き締めを進めているのに対しECBは緩和的であることは不変。金融政策の違いを背景に引き続きユーロ安方向に見ていきたい。但し、急激なリスクオフ相場によるユーロショート巻き戻しの動きには十分注意する必要があるだろう。
森谷	1.0500 ~ 1.1050	先月はECB理事会後こそショートカバーによる上昇が見られたが、その後は上値の重い推移。追加緩和が意識されるECBと次回利上げ時期を探るFRBとの金融政策格差が明確である以上、ユーロを積極的に買う動きは見られづらいだろう。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.4700 ~ 1.5100
GBP/JPY 175.00 ~ 181.00

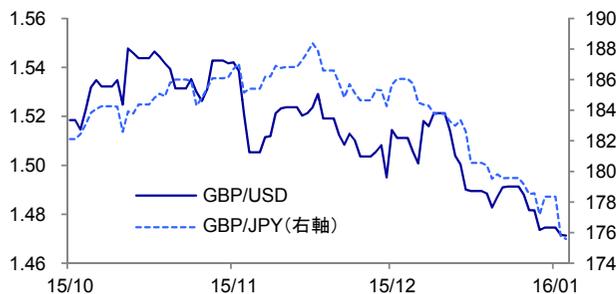
欧州資金部 本多 秀俊

■ 先月の為替相場

12月のポンド相場は、主要通貨に対して全面安。月前半、対ドルでは断続的な反発を見せる局面も観察されたが、対円、対ユーロでは月を通してほぼ一貫して下落。対ドルでも後半はほぼ一方的な下落となった。金融市場全般の関心は16日のFOMCに集まっていたが、対ユーロ、対円でポンドが大きく水準を切り下げたのも、きっかけはそれぞれECB、日銀の金融政策決定だった。ポンド軟調の背景にも、英利上げ観測の後退があったものと考えられ、12月のポンド相場は金融政策動向に大きく振られたと言えただろう。一連の動きを時系列に従って整理すると、まず、3日、ECBの追加金融緩和はドラギ総裁によって膨らんだ期待に届かないという評価でユーロの全面急騰を招いた。ポンドも対ユーロでは急落したが、対ドル、対円ではユーロに連れる格好で堅調に推移した。翌4日発表された米11月雇用統計は、予想以上の雇用の伸びを示し、FRBによる12月利上げの織り込みが一段と進捗、ドルの全面高を誘った。もっともこの時点までに米利上げの織り込みは十分に進んでおり、ドル上昇は穏やかなものとなった。果たして、16日、FRBは市場の予想通り9年半ぶりの利上げに踏み切った(+25bp)。利上げ後は調整的なドル軟調を予想したが、ドルは思いの外堅調。これはFOMCの各委員の予想する将来的な政策金利動向(所謂ドットチャート)に予想されたほどの下方修正が確認できなかったことが要因と考えられた。更に18日には、日銀による「金融緩和の補完措置」が思いがけず円全面高を招いた。BOEの金融政策に関しては、これといってポンドの値動きに大きく影響する要人発言などがあったわけではない。敢えて挙げると、14日、シャフィック副総裁が「物価が誘導目標に達すると確信できるほど賃金が上昇するまで利上げに投票するつもりはない」「今はその時期ではない」と述べていたが、FOMC直前でほとんど市場の注目を集めなかった。そもそも、7月の一総裁が「利上げ開始の時期は今年末までには明確になっている」と12月の時点で述べていた経緯を振り返れば、12月になっても利上げに向けた議論がまるで本格化しない現実、BOEが市場に発するメッセージの重要性を明らかに損なう状況と言えた。また、英経済指標も、ポンドに与える影響は押し並べて限定的ではあったが、1日の11月製造業PMI、8日の10月製造業生産、10日の10月貿易収支、16日の8~10月平均賃金、23日の7~9月期GDP確報値など、市場予想を下回り、失望を買う数字に殊更注目が集まり、8日の10月鉱工業生産、16日の8~10月ILO基準失業率、17日の11月小売売上高など強めの数字は全般に黙殺される傾向が強かった。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月の見通し

1月のポンド相場は、安値圏での膠着を予想。2015年の主要通貨相場は、FRBの利上げ開始時期を巡る駆け引きに終始した感が強かったが、2016年も、少なくとも当面は各国/経済の金融政策動向が関心を集める展開が続くのではないかと。引き続きFRBの追加利上げのペースに注目が集まるよう、ポンドに関してはBOE利上げ開始のタイミングも非常に重要。米英いずれにおいても鍵を握るのは、まず原油価格動向であろう。原油価格動向は、およそほとんどの国/経済の物価に多かれ少なかれ同じように影響するはずだが、仮に原油価格の低迷が長引き、物価の下振れ圧力が続く環境では、既に利上げ局面に移行した国の通貨(ドル)に対する調整安圧力よりも、いつまでも利上げに踏み切れない国の通貨(ポンドなど)が受ける下押し圧力の方が勝るのではないかと。米の原油輸出解禁でシェールなど米国内産原油とブレントなど米以外を産地とする原油の価格差が縮まり易い/逆転する環境では尚更そうした傾向は強まる可能性がある(万が一、FRBの利上げ取り消し=利下げが取り沙汰されるような環境になれば話は別だが)。逆に、原油価格が復調し、物価も世界的に上昇基調が鮮明になるなら、FRBの利上げペースも当然速まるものと、FRBに追随するであろう国の通貨の方が買われ易い環境になるのではないかと。原油価格は米の供給減などを要因に反発を見込んでおり、仮定の上に仮定を重ねる議論ではあるが、BOE利上げ観測を追い風に、中期的には、ポンドは対ドルで上昇余地を広げていくものと見込んでいる。ただ、1月の予想となる事情は大きく異なる。仮に原油価格が予想通り反発するとしても、1月中にその反発基調が確認される可能性は低いし、なにより、足許英経済の低迷ぶりが気に掛かる。足許英経済は、2015年5月の総選挙に向け、財政出動で作られた好景気が、保守党単独政権確立後の財政緊縮への切り替えて、大きく減速する局面にある。そのこと自体驚くには当たらないが、問題は、景気の下振れがBOEの金融政策方針に十分に織り込まれていないことであろう。BOEは11月の四半期インフレ報告書で2015年通年(暦年)のGDPを+2.7%と予測していたが、それは、7~9月期GDPが英統計局の発表した速報値(前年比+2.3%)から上方修正されたことを前提とした試算だった。しかし、現実には同指数は(+2.1%)に下方修正されており、ここでも英中銀の見通しの甘さに失望が広がる結果となった。ポンドの膠着を見込むのは、中期的なポンド反発期待と短期的な英米態経済に対する失望とが交錯することで、目先、明確な方向感を見出せない状況を想定しているということだ。

■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』
イギリスの朝食の典型と言えば、「まんまやんけ〜」と言われそうですが、イングリッシュブレックファストでしょうか。当地には「王のように朝食を摂り、王子のように昼食を摂り、貧民のように夕食を摂る(のが健康の秘訣)」ということわざがあり、イングリッシュブレックファストはその通りの重たい(脂っこい)食事です。個人的に欠かせないと思うのは、まず、ベーコンとソーセージ、続いて卵(目玉焼き、スクランブルエッグ、ポーチドエッグ)とベイクトビーンズ。マッシュルームやベイクトマトも好きですが、ハッシュブラウンやブラックプディングが加わると、かなり本格的になるでしょうか。トーストはあくまでも添え物で、個人的にはあってもなくてもどっちでも良いのですが、あればベーコンを挟んでバター、ブラウンソースとイングリッシュマスタードを塗り、ベーコントーストにして食べます。そういえば、イギリスに来て間もない頃、イギリス人(正確にはアイルランド人だったけど)が「ベイクトビーンズトーストを好んで食べる」と聞いて、気が知れない思いをしたことを思い出しました。今では「トーストにベイクトビーンズ?」「普通じゃん」と思って平気で食べています。もっとも、過去15年ぐらいで、イギリスの食事が目覚ましい改善を遂げるのと入れ替わりに、朝食はフルーツやヨーグルトなどで軽めに摂るのが一般的になってきました。一方で、イングリッシュブレックファストに対する根強い支持もあるようで、「オールディブレックファスト」などと言って、一日中イングリッシュブレックファストを食べさせるパブ、レストランなども沢山あります。健康のためには、上記ことわざの通り、朝起きて1日分のエネルギーをしっかり補給し、夜寝る前には軽めの食事にして胃腸を休める方が理に適っているような気がしますが、そう思って朝食をがっつり食べた上で、夜は大酒くらって際限なく大食してしまう自分は、生活態度を改める必要があります。

■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/8	鉱工業生産(前年比)	10月	1.2%	1.7%	1.5%
12/8	製造業生産(前年比)	10月	0.0%	-0.1%	-0.4%
12/10	英中銀基準金利		0.50%	0.50%	0.50%
12/10	貿易収支(百万ポンド)	10月	-1800	-4140	-1073
12/15	消費者物価指数(前年比)	11月	0.1%	0.1%	-0.1%
12/16	ILO失業率	8-10月	5.3%	5.2%	5.3%
12/16	週平均賃金上昇率(前年比)	8-10月	2.5%	2.4%	3.0%
12/17	小売売上高(含自動車/前年比)	11月	3.0%	5.0%	4.2%
12/23	GDP(前年比)	3Q F	2.3%	2.1%	2.3%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6800 ~ 0.7500
AUD/JPY 85.00 ~ 90.00

シドニー支店 山口 美紀

■ 先月の為替相場

12月の豪ドルは、0.72を中心とした揉み合い推移。

月初、豪ドルは0.72前半でスタート。1日、豪準備銀行(RBA)理事会では予想通り政策金利が2.00%に据え置かれ、豪ドルの動きは限定的。その後、米ISM製造業景況指数が景気拡大・縮小の境目である50を3年ぶりに下回る48.6となると、ドル安が進行し、豪ドルは0.73前半に上伸した。翌日、豪7-9月期GDPが予想前年比+2.4%に対して、結果同+2.5%と上振れるも、豪ドルは大きな動き出さず。4日、米11月雇用統計は非農業部門雇用者数が+21.1万人増加(予想+20.0万人増加)、失業率が5.0%(予想5.0%)となり、一旦は米ドル買いで反応し、豪ドルは0.73前半→0.72後半に急落するも、良好な雇用統計を好感して、米株が上昇すると、豪ドルも12月高値0.7386まで大幅反発した。

7日、豪州主要輸出品目である鉄鉱石(鉄分62%)が節目U\$40を下回り、豪ドルは0.72後半に反落。翌日、豪州の最大貿易国である中国の11月貿易収支が発表されたが、予想U\$640億黒字に対して、結果U\$541億黒字と黒字幅が市場予想に届かなかった。更に、軟調な商品価格も重石となり、豪ドルは0.71後半に値を下げた。その後、0.71後半→0.72前半で揉み合い推移した。10日、豪11月雇用統計において、雇用者数変化が+7.1万人増加と予想▲1万人減少を大幅に上回り、0.73前半に急伸。しかし、上昇は続かず、軟調な商品価格推移を背景に、再び0.71後半に反落した。17日早朝、FOMCにて9年半ぶりの利上げ、及び2016年の利上げペース年4回が据え置かれ、次第に米ドル買いが進み、豪ドルは12月安値0.7097に下落した。

18日、日銀金融政策決定会合において、政策の微修正パッケージが打ち出されたが、豪ドルへの影響は限定的。しかし、豪ドルの買い戻しが入り、豪ドルは0.71前半→0.71後半に上昇。その後も、クリスマス・年末を控え、市場参加者が少ない中、豪ドルは堅調推移し、0.72後半で越年。

■ 今月の見通し

1月の豪ドルはじりじり下げる展開か。1月27日の豪10~12月期消費者物価指数(CPI)に注目。

12月のFOMCでは9年半ぶりに利上げが行われた。政策金利は25bp引き上げられ0.25~0.50%となった。注目のFOMCメンバー金利予測による利上げ回数は2016年4回(前回4回)、2017年4回(前回5回)、2018年3.5回(前回3回)と、ほぼ前回と同様の内容となった(1回の利上げ幅は25bpで計算)。一方、声明文・イエレンFRB議長記者会見では「今後の緩やかな利上げ」を強調したややハト派(金融引締慎重派)となった。更に今後の金融政策は「経済動向次第」とも示しており、引き続き、米雇用統計やインフレ指標などの米経済指標への関心が集まる。また、年4回の利上げを実施する場合、FOMCは年8回あり、次回利上げは1月28~29日会合の次の3月中旬の会合と予想される。次の利上げまで少し時間があることを考えると、急激なドル高(豪ドル安)は進行しにくい状況と考える。

一方、豪州では、12月RBA理事会の声明文に「インフレ率は低水準となっているため、経済の下支えが必要であれば追加利下げの余地がある」と記され、前回声明文を踏襲する内容となった。したがって、1月27日発表の豪10~12月期のCPI結果が非常に重要になる。前回10月下旬に発表された豪7~9月期CPIは前年比+1.5%と予想同+1.7%を▲0.2ポイント下回る結果となり、更に11月に発表されたRBA四半期金融政策報告書でも基調インフレ率見通しが引き下げられたことから、低インフレ懸念が残る。RBA四半期金融政策報告書では2015年12月のCPI:同+1.50%、基調インフレ(トリム平均CPI+加重平均CPI)÷2):+1.75%と示されており、今回発表される豪10~12月期のCPIがこの数値を下回った場合、2月RBA理事会での追加緩和期待が高まり、豪ドルは2015年安値0.6892をブレイクするリスクがあるので留意したい。

また、商品市況の軟調推移が続いている。豪州主要輸出品目の鉄鉱石(鉄分62%)はどうとう節目の40ドルを割れた。OPECが減産を見送ったことが重石となり、NY原油先物(WTI)も35ドルを割れ、コモデティ通貨の豪ドルの下落材料となる。

以上のことから、豪ドルはじりじりと下落する展開を予想する。なお、1月の豪州注目指標は、貿易収支(7日)、小売売上高(8日)、雇用統計(14日)、消費者物価指数(27日)。

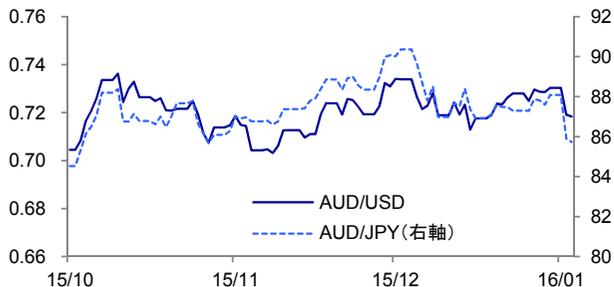
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』

このタイトルでまず思いつくのは、ハリウッドスターのレオナルド・ディカプリオやトム・クルーズ御用達と言われている「Bills」。「世界一の朝食」と呼ばれ、ハリウッド・セレブが愛してやまないというシドニー本店のレストランです。特に朝食メニューが有名で、オーナーシェフのビル・グレンジャー氏はニューヨークタイムズにて「シドニーのエッグマスター」と評されたほどです。スクランブルエッグも美味しいですし、日本で流行したりコッタパンケーキも美味ですね。美味しいので、朝からつい食べ過ぎてしまう傾向があります。実際、レオナルド・ディカプリオも映画撮影中にパンケーキにハマり、激太りして、ついには監督から禁止令を出されてしまったという噂もあります。先日の健康診断でコレステロール値が黄色信号だった私も、食べ過ぎには注意したいところです。「世界一」繋がりで言うと、地理的な関係上、オセアニア(NZ・ウェリントン市場、AU・シドニー市場)はグローバルで最も早い為替市場のオープンとなります。シドニー時間月曜日朝5時スタート。したがって、ディーリングルームメンバーの朝食は世界一早い(?)朝食となります。オーストラリアで有名な朝食、ベジマイトトースト(ベジマイト:イースト菌抽出物(酵母エキス)を元に作られた醸造の副生成物で黒いペースト状のもの)や、オートミール(栄養豊富な全粒穀物で、水や牛乳、豆乳で煮て粥状にして食べたりする、朝食用のシリアルとして食べる人が多い)を食べています。それに加えて、コーヒー(アメリカンではなく、エスプレッソベース)を飲むことがチームメンバーのお決まりの朝食メニューです。ただ、あまりにも朝食の時間が早いせいか、いやいや一生懸命頭をフル回転させて働いているせいか、メンバーの中には「セカンドブレイクファースト」と言い、午前10時過ぎに2回目の朝食を食べている者もいます。それは「ただの間食では?」と思いますが、これは心の中に閉まっておきます。

■ 為替の動き

(資料)ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	RBAキャッシュレート		2.00%	2.00%	2.00%
12/2	GDP[前期比/前年比]	7-9月	0.8%/2.4%	0.9%/2.5%	0.3%/1.9%
12/3	貿易収支	10月	▲\$2600M	▲\$3305M	▲\$2403M
12/4	小売売上高[前月比]	10月	0.4%	0.5%	0.4%
12/9	住宅ローン[前月比]	10月	▲1.0%	▲0.5%	2.0%
12/10	雇用者数変化	10月	▲10.0千人	71.4千人	56.1千人
12/10	失業率	10月	6.0%	5.8%	5.9%
12/15	RBA議事録				

(資料)ブルームバーク

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.3600 ~ 1.4200
CAD/JPY 85.00 ~ 90.40

米州資金部 高橋 勝彦

■ 先月の為替相場

月初、カナダ月次GDPが予想外のマイナスとなったように、足元で冴えないカナダ経済指標が多かったことから、カナダ中銀(政策金利0.50%据え置き)の声明が前回からハト派に傾くのではとの見方も出ていたが、経済見通しは概ね10月の見方と変わらないとの認識を示したことで、カナダドルの買戻しが入り、ドル/カナダドルは一時1.3300付近まで下落した。しかし、比較的良かった米雇用統計に比べてカナダ雇用統計は不調な内容で、失業率は予想外に悪化、雇用者数は予想以上の減少となったほか、OPEC総会では生産枠を据え置いたことから供給過剰の思惑が強まり原油価格が急落するなかで、カナダドルの上値は重たかった。その後、OPECの生産目標の棚上げ、減産見送りを受けて、世界的な供給過剰状態が続くと懸念や、中国の景気減速による需要後退懸念から、商品市場で原油が下げ止まらず、呼応するようにカナダドルは売りが続き、ドル/カナダドルは1.37台半ばまで上昇した。

月中、米FOMC発表直後は大方予想通りだったこともあり、また、判断もつき辛かったことから、為替市場も方向感はなく上下動した。しかし、米株式市場は米利上げをポジティブに受け止め、徐々に上げ幅を拡大したことから、ドル高の動きが見られ、ドル/カナダドルは1.39台へ上昇した。

月後半、カナダ消費者物価指数は予想下振れ、卸売売上高は予想外のマイナスの伸びだったことを受け、原油安も加わり、ドル/カナダドルは2004年5月以来の1.40台となる一時1.4003までドル高/カナダドル安が進んだ。しかしこのレベルでは利益確定からドル売り、カナダドル買いが強まり、また、週間石油在庫統計で在庫減が明らかになったことや、原油相場でクリスマス休暇を控えショートカバーが強まる展開にドル/カナダドルは1.3800割れ目前まで反落した。年末に掛けては市場参加が年末休暇で減少に、流動性が大幅に低下する中、1.3900を挟んだ閑散な取引が続き、今年の取引を終了した。

■ 今月の見通し

カナダドルは原油安の影響で対主要通貨で軟調な推移が続いている。注目されるOPECの動きについては、米国の産油量が大幅な拡大をみせていることで米国内では原油在庫が大幅に拡大しており、OPECが減産したとしても原油価格の下支えにつながるかどうか不透明な中では、減産決定に向けて動くのは難しいと思われる。かかる状況下、中国を始めとした新興国経済の減速は更に強まると予想され、リスク回避の雰囲気が強まる局面が多くなると考えることから、資源国通貨であるカナダドルも弱含む展開が見込まれる。

米経済の好調やカナダドル安もあって、カナダの製造業の輸出は堅調なもの、資源関連は不調が続いており、カナダ経済を圧迫している。特に原油価格が戻らないようであれば、資源関連企業の設備投資は更に落ち込むとも予想され、カナダ経済も本格的な回復とはならないだろう。前回の理事会でカナダ中銀は中立スタンスを維持しているが、原油価格が更に落ち込むようであれば、再度ハト派的となり、利下げの可能性を示唆してくると考える。また、ポロツ・カナダ中銀総裁は講演で、マイナス0.5%程度を下限としたマイナス金利は理論的に可能との認識を示している。現状では必要ないとしながらも、非伝等的な措置を実施する用意があることを示唆している。米国の利上げに方向が向いている中、カナダ中銀総裁はマクロ経済に米国との違いがあることから追随すべきではないとの見解を示しており、これもカナダドルの上値を重くする要因の1つとなるだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

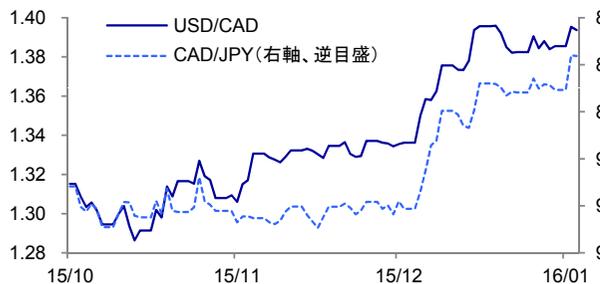
『当地の朝食事情』

トロントの朝の街角では、特大のコーヒーカップを片手に、歯にしみるくらい甘いドーナツをほおぼる人々が、せかせかとオフィスに向かう光景をあちこちで見かけます。初めてトロントに来た当時は「朝食にコーヒーとドーナツ!?!」と驚かされましたが、今ではちゃっかり私もその仲間に入っています。

カナダの朝食といえばパンケーキやシリアル、ベーグルにスクランブルエッグを思い浮かべる方もいますし、実際そのような朝食をとっている方々もたくさんいます。また健康志向で野菜スティックやスムージーで体調管理をしている方もいます。しかしそんな健康志向な方でも「今日は特別!」とコーヒーとドーナツの朝食を解禁していたり、海外からカナダに朝到着する飛行機から降りてくるカナダ人が、薬物中毒のようにコーヒーとドーナツを探してさまよう姿を見かけると、これがカナダの朝食なんだと思います。(カナダ支店 リチャーズあずさ)

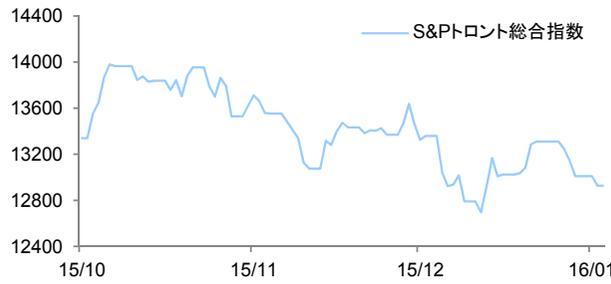
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/2	カナダ銀行翌日物貸出金利		0.50%	0.50%	0.50%
12/4	失業率	11月	7.0%	7.1%	7.0%
12/4	雇用ネット変化率	11月	-10.0K	-35.7K	44.4K
12/4	Ivey購買部協会指数	11月	53.0	63.6	53.1
12/18	消費者物価指数(前年比)	11月	1.5%	1.4%	1.0%
12/18	CPIコア(前年比)	11月	2.3%	2.0%	2.1%
12/23	GDP(前月比)	10月	0.1%	-0.5%	0.5%
12/23	GDP(前年比)	10月	-0.1%	-0.2%	0.1%
12/23	小売売上高(前月比)	10月	0.4%	0.1%	-0.4%
12/23	小売売上高(除自動車/前月比)	10月	0.4%	0.0%	-0.4%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1135	~	1195
KRW/JPY	10.10	~	10.64
JPY/KRW	9.40	~	9.90

(注)100韓国ウォンあたりの対円レート

ソウル資金室 山口 智裕

■ 先月の為替相場

12月のドル/ウォンは、2か月連続で続伸。米FOMCまでは上昇したが、その後は上げ幅を縮小する展開となった。

月初旬のドル/ウォンは、米雇用統計の底堅い結果を受けて上昇した。ドル/ウォンは、前月末比横ばいの1158.1ウォンで取引を開始し、2日の朝方に月安値となる1153.7ウォンをつけた。その後は大規模な追加金融緩和が予想されていた3日のECB理事会や、米FOMC直前の米12月雇用統計を控えてドル高地合いとなり、ドル/ウォンも1170台まで上昇。ECB理事会では、追加金融緩和が発表されたものの、事前市場予想を大幅に下回る決定がなされたことから、ユーロが急騰し、ドルが下落。かかる中、ドル/ウォンは一旦前月末比横ばい近辺まで下落した。しかし、4日に発表された米11月雇用統計が市場予想を上回り、市場参加者間で16日のFOMCでの利上げがほぼ確実視される結果となった。こうした中、原油価格が下落基調を継続し、ドル/ウォンは再度上げ幅を拡大する展開となった。10日の韓国銀行金融通貨委員会では、市場予想通り全会一致で政策金利が据え置かれたものの、李韓国銀行総裁は「対外経済環境を受けて韓国国内経済成長の不確実性が高まった」と述べ、ややハト派なスタンスを示したことから、ドル/ウォンは10日には1180ウォン台まで上昇して引けた。

月中旬のドル/ウォンは、16日の米FOMCで利上げが決定されると、月高値圏で推移した。16日にFOMCを控えて原油価格を中心に各市場が神経質な展開が継続する中、11日の韓国市場引け後に中国当局が新たな人民元指数を発表。市場参加者間では、これが一段の人民元安容認との見方が強まり、アジア通貨が全般的に下落。これを受けて、ドル/ウォンは14日の取引開始直後に、月高値となる前月末比+30.3ウォン安となる1188.4ウォンまで上昇した。注目されていた16日の米FOMCでは市場予想通り、政策金利の引き上げが実施されたほか、FRBメンバーの政策金利見通しでは、2016年に4回程度の利上げを行うスタンスが維持された。FOMC後も原油価格下落が継続したことから、ドル/ウォンは18日に月高値近辺まで再度上昇した。

月下旬のドル/ウォンは上げ幅を縮小。原油価格下落が一服し、株式市場がグローバルに堅調推移する中、上げ幅を縮小する展開となり、前月末比14.4ウォン安の1172.5で引けた。

■ 今月の見通し

米利上げに関するドル高が一服しつつあることから、1月ドル/ウォンは、やや軟調な展開を予想する。

米国の金融政策については、12月には市場予想通り利上げが開始されたが、利上げペースについては、相応に緩やかなペースが予想されており、1月27日のFOMCでは特段波乱はない見通しである。

一方、韓国の金融政策については、李韓銀総裁のハト派な発言を受けて2016年前半での追加利下げ期待が一部高まっている。しかし、2015年12月に決定された2016年予算では、予算規模は2015年と概ね同水準であるが、上半期に予算執行の68%が割り当てられており、直ちに利下げ観測が高まる状況ではないと考えている。また、チェ・ギョンファン副首相兼企画財政部長官の後任には、与党セヌリ党で親朴大統領派といわれる柳一鎬(ユ・イルホ)国会議員(60)が内定した。内定後のインタビューでは、当面チェ副首相の現政策を維持していく方針と述べており、大きな混乱はないと思われる。

これらのことから、1月のドル/ウォンはウォンが底堅く推移する展開を予想している。ただし、原油価格動向(とそれに関する投機的格付けの社債動向)や中国経済動向には引き続き注意が必要である。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』

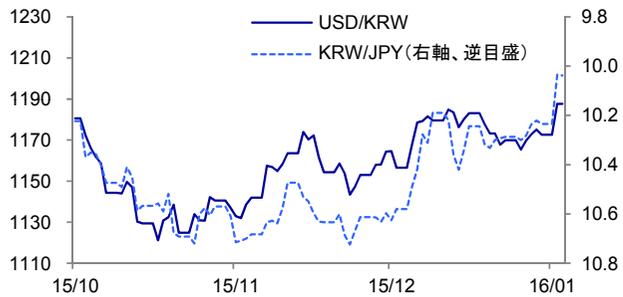
朝食は簡単に済ませてしまっている為、韓国の朝食事情はよく分かりません。また、ディーリングルーム内の職員に韓国の朝食事情を聞いても、同じく簡単に済ませている人が大半でした。

ただ、二日酔いをした時の朝食は、「ヘジャングッ(解腸スープ)」を食べる人が多いようです。ヘジャングッは二日酔い解消効果があるとされるスープの総称であり、さまざまな食材で作られています。たとえば、もやしが大メインの「コンナムルグッ」、干シタラのだしを使った「プゴグッ」、貝のだしを使った「チョゲグッ」などがあります。

実際、熱々のスープを流し込むことで、汗と共にアルコールが抜けていく気がします。私もお酒を飲んだ翌朝は、自然とヘジャングッの売っている食堂に向かうようになりました。ソウルでお酒を飲み過ぎてしまった翌朝はヘジャングッを食べてみてはいかがでしょうか。(吉田)

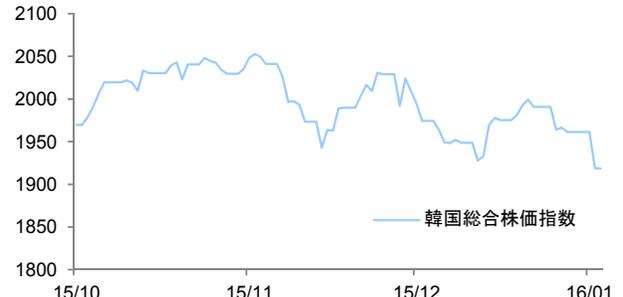
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	消費者物価指数(前年比)	Nov	0.9%	1.0%	0.9%
12/1	貿易収支(通関ベース)	Nov	\$6957m	\$10361m	\$6603m
12/3	実質GDP前年同期比	2 3Q	---	2.7%	2.6%
12/10	韓国銀行7日間レポレート	Dec	1.5%	1.5%	1.5%
12/16	失業率	Nov	3.4%	3.4%	3.4%
12/24	消費者信頼感	Dec	---	103	106
12/30	鉱工業生産 前年比	Nov	1.6%	-0.3%	1.7%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 32.50 ~ 33.30
TWD/JPY 3.60 ~ 3.78

台北資金室 辻野 順治

■ 先月の為替相場

12月のドル/台湾ドル相場は、小幅安。

12月のドル/台湾ドル相場は、32.60近辺でオープン。月初は、米利上げへの期待感から、台湾ドルは軟調に推移。米11月ADP雇用統計やイエレンFRB議長の見聞談などから米ドル高も進んだことで、3日は32.70台後半まで台湾ドル安が進行。4日は、ECBの緩和内容が市場予想を大きく下回ったことで、米ドルインデックスは大幅に下落したものの、32.70台を維持。週明け、7日以降は、米11月雇用統計が良好な結果となったことで、8日には、32.80台へ台湾ドル安が進み、9～11日は32.80付近で膠着。

14日は、株式市場の調整など、リスクオフムードが強まる中、小幅台湾ドル安となり、32.90台に乗せたものの、底打ち感が拡がると、15、16日は、32.80付近まで台湾ドルが反発。17日は、前日の米利上げ決定、FOMCメンバーの金利見通しが微修正に留まったことで、米ドルが上昇したものの、台湾中銀会合を控え、32.80付近での取引が継続。取引終了後に発表された台湾中銀会合の結果は、予想外の利下げ決定。これを受け、18日は、32.90付近まで小幅に台湾ドル安が進行した。

21日の週は、原油反発などが米ドル安に繋がる中、台湾ドル高圧力が続く展開。21、22日は32.80台半ば、23日には32.80付近、24日には32.70台後半、25日は32.70台半ばと、小刻みな動きながら、小幅台湾ドル高となった。28日以降は、米ドル反発により、台湾ドル安に転じ、28、29日は、32.80付近での取引。30、31日は、32.80台後半での取引となった。但し、決算期末を控えるせいとか、韓国ウォンや人民元の下落と比べると、台湾ドルは鈍い動きが目立った。

■ 今月の見通し

1月のドル/台湾ドル相場は、小幅台湾ドル安を見込む。

台湾11月貿易統計(米ドル換算)では原油安による輸入額減少の一方で、輸出の落ち込みも大きく、貿易黒字は前年比縮小。11月消費者物価指数(CPI)は、3か月連続でプラス。引き続き天候影響による生鮮品価格上昇が主因で、いずれマイナスへの転落が見込まれる。

米利上げが始まり、次の焦点は、次回利上げの時期。FOMCメンバーの金利見通しでは、年4回、0.25%ずつの利上げが目安となるが、まだ市場の見方は半信半疑な状況。この状況で、1月の米経済統計が好調な結果となれば、3月利上げ期待が台頭し、米ドル上昇、台湾ドル安という展開が期待される。

一方、台湾は12月に利下げを行い、利下げ継続への期待感から台湾ドル安が進んでもおかしくはないが、利下げ後の動きは限定的。単に12月の台湾中銀決算期末を控え、動きが抑制されているのであれば心配は無いものの、市場の利下げ期待が定まらないことで台湾ドル安が進まないとしたら、惜しい結果と言える。そもそも、9月の利下げ時は、オーバーナイト金利が先んじて低下していたが、12月利下げ時は、オーバーナイト金利に動きが見られないまま、利下げが決まった。(利下げ翌日、オーバーナイト金利が7bpほど低下。)市場金利と政策金利の動きが一致するのは本来の姿かもしれないが、9月とは異なる動きに、意外感が拡がった。また、利下げ決定後の中銀説明資料では、前回から用いられている実質金利他国比較において、インフレ率の定義が変更され、依然、実質金利が他国比高いことが示されるなど、やや一貫性を欠いた説明も行われている。リーマンショック期の利下げ局面を踏まえると、利下げ可能な回数は残り3回。金利スワップ市場を見ると、6か月物では、3月利下げは織り込まれつつあるが、1年物を見る限り、6月以降の利下げは織り込まれていない。市場での今後の見通しが収束しなければ、利下げを通じた台湾ドル安誘導の効力が十分に発揮されない恐れもあり、市場金利低下を先行させるという従来のやり方が復活することに期待したい。その場合は、素直に台湾安が見込まれるだろう。なお、総統選が予定されているが、現状の予想通りの結果となれば、為替相場への影響は些少だろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』

共働きが多いことも関係していると思いますが、朝食屋、朝食屋台は街の至るところにあります。主な特徴は以下の通りとなります。

①種類

伝統的な店は、豆乳屋です。豆乳と揚げパンのセットなどが楽しめます。なお、当地の豆乳は、「豆漿」という名称で、味は薄く、日本のいわゆる豆乳とは若干異なります。また、伝統的な店以外も、サンドイッチやハンバーガーなどもあります。私のお気に入りには蛋餅という食べ物です。鉄板で、水で溶いた小麦粉を焼いて、卵を焼いて、ベーコンなどを挟んだ食べ物です。単純な食べ物ですが、結構美味しいです。

②注文方法

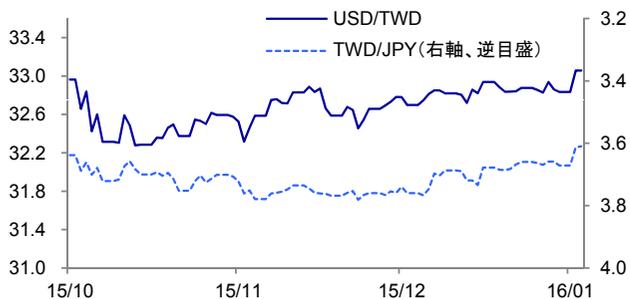
朝食は、特にテイクアウトの場合、指差して乗り切れず、メニューを発音せざるを得ない局面もあります。”起司(チーズ)”、“培根(ベーコン)”など、西洋の言葉がそのまま使われているなど、看板を見て、意味は分かるのですが、店員に伝えるのは苦勞します。チーズ1個、ベーコン1個を頼んだつもりが、チーズ&ベーコンが1個出てくるということもあります。

③その他

朝食を専門としている店も多いです。肉まん屋など、朝しか空いていない店もあります。前述の蛋餅屋も、夜開店して、朝10時くらいに閉まります。行きたい店は営業時間を事前に確認したほうが良いでしょう。

■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/7	輸出 (前年比)	11月	-10.60%	-16.90%	-11.00%
12/7	輸入 (前年比)	11月	-19.70%	-13.70%	-20.00%
12/8	CPI (前年比)	11月	0.36%	0.53%	0.31%
12/21	輸出受注 (前年比)	11月	-5.30%	-6.30%	-5.30%
12/22	失業率	11月	3.80%	3.84%	3.79%
12/23	鉱工業生産 (前年比)	11月	-5.55%	-4.94%	-6.15%

(資料)ブルームバーグ

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7500 ~ 7.7600
HKD/JPY 15.22 ~ 15.80

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【12月の香港ドル直物相場】

月初の米ドル/香港ドルは、フローと見られる香港ドル売りの動きから7.7560台まで香港ドル安が進行。しかしこの動きは長くは続かず、再び香港ドルの高値である7.7500ちょうど近辺まで下落した。その後米国の利上げを受け、米ドルと香港ドルの金利差が拡大するとの思惑から米ドル/香港ドルは7.7530台まで上昇。為替先物市場でも同様の理由からディスカウント幅が拡大し、1年物の先物為替で2011年以来の水準へと下落した。

【12月の香港ドル金利】

FRBによる利上げの影響を受けるものの、HIBORカーブは比較的安定した動き。これは過去数か月に及ぶ香港金融管理局(HKMA)による香港ドル売り介入等から香港ドルの流動性が引続き潤沢であることを示唆している。この潤沢な流動性から香港ドル金利が必ずしも米ドルに追随しないように思われる。

【12月の香港株式市場】

香港の代表的な指標であるハンセン指数は、月前半は米FOMC前の不透明感から下落したものの、FRBによる利上げ決定後に米株式市場が上昇に転じるとハンセン指数も追随し、月前半の下げ幅をほぼ取り戻した。

■ 今月の見通し

【1月の香港ドル直物相場】

米国利上げによる金利差拡大から米ドル/香港ドルは上昇圧力がかなり易い状況と考える。一方、オフショア人民元の下落に終息感が見られないことから、人民元資産を香港ドルにシフトさせる動きも想定され、これは米ドル/香港ドルの上値を抑える要因になりそうだ。

【1月の香港ドル金利市場】

引続き香港ドルの流動性は潤沢な状況が継続するものと思われることから、香港ドル金利については現状水準で安定的な動きとなるであろう。中長期金利については、対ドルでのペッグ制度が解消され香港ドル資産への投資妙味が減退するリスクもあり、ベーシススプレッド幅がやや拡大するリスクもあるだろう。

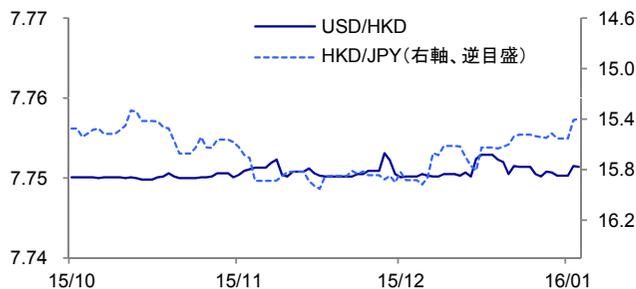
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』

香港の人々の労働時間は長時間に及ぶため、彼らはいつも急いで朝食を取っている。朝食をゆっくり食べることよりも、「睡眠時間を確保しパンなどの簡単な朝食を買って済ませる」というようなスタイルを好む。朝の通勤時間帯には、このような需要を取り込むために、食べやすい包装に包まれた所謂ファストフードを取り扱う店が多い。また、電子的なプリペイドカードによる支払いが出来る店も多い。週末においても、昼ごろまでゆっくり寝たいとするのが香港の人の傾向でもあり、このことが「ブランチ」(朝食と昼食の間にとる食事のこと)を香港でもっともポピュラーな食事のスタイルとして定着させた。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/3	日経香港PMI	11月	--	46.6	46.6
12/7	外貨準備高	11月	--	\$355.8b	\$357.1b
12/14	鉱工業生産(前年比)	3Q	--	-1.90%	-1.20%
12/14	PPI 前年比	3Q	--	-4.40%	-2.80%
12/17	失業率(季調済)	11月	3.30%	3.30%	3.30%
12/21	CPIコンボジット(前年比)	11月	2.30%	2.40%	2.40%
12/21	総合国際収支	3Q	--	\$71.52b	\$76.66b
12/28	輸出(前年比)	11月	-2.80%	-3.50%	-3.70%
12/28	輸入(前年比)	11月	-7.10%	-8.10%	-8.50%
12/28	貿易収支 HKD	11月	-37.5b	-33.1b	-29.6b

(資料) ブルームバーク

中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 6.3500 ~ 6.6200
 CNY/JPY 18.38 ~ 20.18
 100JPY/CNY 5.1700 ~ 5.4400

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 大内 聡

■ 先月の為替相場

【SDR組入れ後は人民元安基調で推移。“人民元の国際化”が進展】
 11月末に決定されたIMFの特別引出権(SDR)への人民元組入れによる市場への影響は、当初ほとんど見られなかったものの、12月4日に従前引け間際に実施されていた当局からの介入とみられるドル売りが行われなかったことなども影響し、ドル人民元相場は節目とみられていた6.40を大きく超え人民元安が進展。以降、6.40を超える水準で人民元安基調での推移を継続。また12月11日の引け後には中国人民銀行(PBoC)が運営する中国外国為替取引システム(C-FETS)が人民元の価値を示す新たな指数を発表。新指数の発表を受け、市場では当局が一段の人民元安誘導を企図しているとの思惑も広がり、ドル人民元市場は8月11日以降の水準調整後につけた直近安値の6.4510を下回る水準まで下落。またオフショア人民元市場では断続的にみられていた当局からの介入と思われるドル売りフローも人民元のSDR組入れ後見られなくなり、一時2011年3月以来となる6.56台まで人民元安が進行。オンショア市場とオフショア市場の乖離は900pips台まで進んだ。また12月23日にはPBoCがオンショア人民元市場の取引時間を北京時間23:30まで延長すると発表(取引時間延長は2016年1月4日から)。一定条件を満たす国外金融機関は、オンショア人民元市場へ参入することも発表されており、人民元のSDR組入れに続き、“人民元の国際化”に向けた動きが一段加速した。

【金利相場:流動性は安定した状況が継続】

12月の金利市場は、IPOが再開されたことなどもあり、資金需要は旺盛だったものの、前月に引き続き、大手中資系が資金の供給サイドにまわっていたこと、当局による銀行システムへの資金供給手段である中期流動性ファシリティー(MLF)などの影響もあり、銀行間金利は各ターム共安定的な状況が継続。月末にかけては年末に向けた資金需要から徐々に銀行間金利は上昇。

■ 今月の見通し

2016年の中国経済政策運営方針が議論された中央経済工作会議(12月18日~21日)では経済発展は「依然として突出した矛盾と問題に直面」との現状認識を示した上で「総需要を適度に拡大すると共に、供給側(サプライサイド)の構造改革を強める」方針を明らかにした。また構造改革を進めるにあたっては、想定される景気下押し圧力の強まりに対処する為、積極的な財政政策、減税政策等を探りつつ、機動的な金融政策を行い、構造改革にふさわしい通貨環境を作るとの方針も明らかにしている。来年以降も2015年同様、金融緩和局面は継続する見込み。一方で人民元の国際化に向けた動きは着実に進展しており、一段の人民元国際化に向けた動きが想定される。

【為替:イベントを控え、前半は小動き】

IMFのSDRへの人民元採用を機に、相場は人民元安基調で推移。12月の米ドル金利引上げの影響等もあり、2016年1月の相場は人民元安基調での推移を見込む。

【金利:直近相場は安定。年末資金需要には注意が必要】

足許で金利市場が安定的に推移している背景には中資系大手商業銀行による資金放出があり、中資系商業銀行のスタンスが変わらない限り金利は安定的に推移するだろう。一方で資金の出し手となる中資系大手商業銀行は限定されており、来月以降は春節越えの資金需要から金利が上昇しやすい地合いとなることが想定される。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』
 規則正しく時間通りが、当地中国における食事に対するスタンス。日本人にありがちな朝食を食べていないor食べないことが多い、という話をするとかかなり驚かれ、朝食のススメを説かれます。さて、そんな中国の朝食、どういったものを食べているかというと、日本人の目から見ると非常にバラエティに富んでいます。麺、肉まん、おにぎり、パン、おかゆ、トウモロコシ、揚げパン、フルーツ、中華風クレープ、ちまき、餃子、豆腐、ワンタン、おでん、ゆで卵etc.どれも夕食のおかずになりそうなもの。またこれらを単品で食べることはなく、肉まんとトウモロコシ、おかゆと揚げパン、ちまきと豆腐、と言ったようにセットで朝からかなりたくさん食べます。これが語学堪能、パワフルな当地中国の方を支えているエネルギー源かと感化され、ついつい日本にいる時よりも盛んに朝ごはんを食べ、ついつい日本におにぎりとおでんやバナナとヨーグルトと肉まんを片手に出社。今月は麺と揚げパン、中華風クレープに挑戦です。

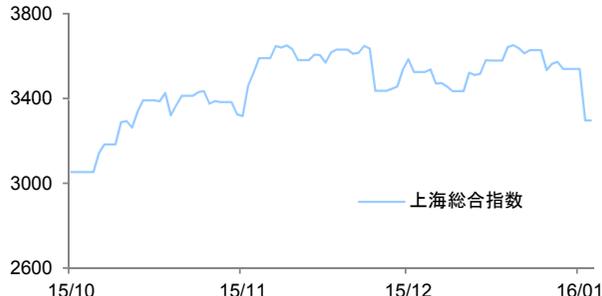
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	製造業PMI	11月	49.8	49.6	49.8
12/8	貿易収支 (USD)	11月	64.0B	54.1B	61.6B
12/8	輸出 (前年比)	11月	-5.0%	-6.8%	-6.9%
12/8	輸入 (前年比)	11月	-11.9%	-8.7%	-18.8%
12/9	CPI (前年比)	11月	1.4%	1.5%	1.3%
12/9	PPI (前年比)	11月	-6.0%	-5.9%	-5.9%
12/12	小売売上高 (前年比)	11月	11.1%	11.2%	11.0%
12/12	鉱工業生産 (前年比)	11月	5.7%	6.2%	5.6%

(資料)ブルームバーグ

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.4000 ~ 1.4350
SGD/JPY 82.50 ~ 85.50

シンガポール資金部 鈴木 教子

■ 先月の為替相場

12月のシンガポールドル(SGD)相場は市場が薄くなる中で神経質な上げ下げが見られたが、方向感に乏しく持ち合いに終わった。

SGDは月初1.41付近でオープン。欧州中銀(ECB)理事会や、米11月雇用統計発表、石油輸出機構(OPEC)総会などの重要イベントを控え前半は小動きだった。3日、ECB理事会で発表された追加緩和が期待外れに終わるとポジション調整でユーロが急騰(1日の上昇幅として約7年来で最大)した。SGD主要バスケット構成通貨であるユーロの大幅上昇を受けてSGDも1.41台前半から1.39台前半までSGD高となった。翌4日発表された米11月雇用統計は12月の利上げ開始を後押しするに十分な良好な内容だったが、利上げ開始はほぼ織り込み済みだったため、週末を控えて市場の反応は限定的となった。

第2週は、クリスマスの接近に伴い市場の流動性が低下し、処々に神経質な値動きが見られた。前半は12月の米利上げ開始がほぼ確実視されたことで改めてドル買いが進み、8日にSGDは1.41台前半まで売られたが、9日にポジション調整で突如として円高が進むと、SGDも連れ高となり1.39台後半まで戻した。11日は連日売られていた人民元がついに8月の切り下げ後の安値を抜いて4年ぶり安値を更新したことでSGDも急反落し、再び1.41台半ばまで売られた。

第3週はFOMC直前の調整により週初はSGDが1.40台前半まで反発。そして迎えた16日のFOMCでは25bpの利上げが実施されたが、市場の予想通りでありドル買いの動きは限定的だった。しかし翌17日は、シンガポール11月非石油輸出が対中国向け輸出の低調により縮小したことや、人民元が4年ぶり安値を更新したことを受けてSGD売りが進み、月間安値となる1.42台前半まで続落した。ところが、18日に日銀が発表した追加緩和の補完策に対する失望から円買いが加速すると、SGDも1.41台前半まで急反発した。

第4週はアジア通貨が概ね堅調推移する中でSGDも堅調推移し、22日には1.40台前半までSGDが買い戻された。11月初旬からほぼ一方的に下落していた人民元がようやく下げ止まり、またインドネシアルピアがFOMC終了のアク抜け感から急反発したことがアジア通貨全般の地合いを支えた。後半は以降はクリスマスのため市場が閑散となり、SGDも1.40台半ばを中心に小動きとなった。その後は年末のドル需要によりSGDが1.41台半ば近辺まで軟化して年末を迎えている。

■ 今月の見通し

1月のシンガポールドル(SGD)相場は持ち合い継続ながら、波乱含みと予想。

年初は地政学的リスクの高まりと共に中国株が急落して始まる波乱の幕開けとなった。長らく不透明要因だった米利上げがついに実施され、今後の利上げは四半期、または半年に一度程度の緩やかなペースになるとの見通しであり、12月のFOMC終了後はアジアから資金流出が加速する懸念は後退したかに見えたが、年初の動きは何かがかきかけとなり中国、ひいては世界経済への不透明感が高まりかねないという懸念を呼び起こした。

シンガポール経済についても中国経済の減速などにより外需が弱く、依然として不透明感が払拭できない。一方物価は長らく低水準に留まっており、2016年も原油安が継続するとすればインフレ加速の可能性は低そうだ。これらの状況に加えて、中国通貨当局が緩やかな人民元安を容認しているとの思惑から人民元の弱含み推移が続けば、当面はSGDの上昇余地も限られると思われる。1月は基本的には昨年9月以来の持ち合い相場が継続すると予想するが、中国経済などへの不透明感が強まった場合はもう一段のSGD安の可能性もあり波乱含みである。SGDの下値はここ4か月の持ち合い相場でサポートされて来た1.43台半ばが目途となる。

1月発表のシンガポール経済指標では、足許の外需の動向の手掛かりとして12月非石油輸出が注目される。その他のイベントでは米FOMC(26~27日)に注目。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』

シンガポールの朝ごはんという「カヤトースト」。ココナッツミルクと卵そして砂糖を混ぜたカヤジャムと、マーガリンをトーストに挟んで焼き上げます。これにローカルコーヒーをセットにするとシンガポール式。シンガポールのローカルコーヒーは砂糖よりコンデンスミルク、「kopi-C」(コピー・シー)と呼ばれ愛されています。甘い物&甘い物の組み合わせですが、朝のエネルギー補給にはナイスです。

しかしながら、甘すぎるものは朝からちよつと…という人もおりますので、ビーフンも人気があります。ホーカーセンターで「エコミックビーフン」と呼ばれており、なかなか美味しい。ビーフン炒めに目玉焼きと練り物(はんぺんみたいな食感)を加えて、チリで味を引き締めます。温かいビーフンにピリッとしたスパイス、朝の寝覚めにはちょうど良いです。またエコミックとうたっているだけにお値段も良心的。カヤトーストをチェーン店で食べると10ドル弱といったところですが、ビーフンの値段は約半分程度で購入可能。味・コスパ共に現地の方にとっても満足のもののように根強い人気があります。

その他にはチキンライス(王道ですな)・ジューチオンファン(米粉を使った料理)・おかゆ等がありますが、シンガポール資金部でみんなで朝ごはんを食べるときはビーフンを必ずチョイス。やっぱりコスパは重要です。(鳥場 泉水)

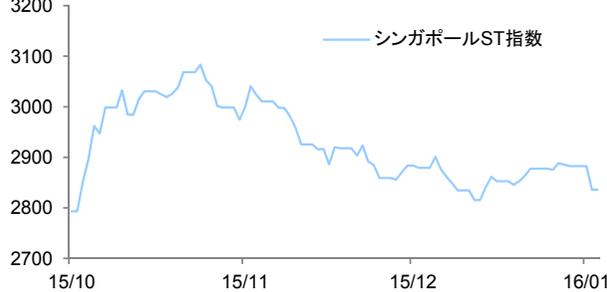
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/2	購買部景気数	11月	49.0	49.2	48.9
12/2	電子機器指数	11月	48.8	49.0	48.6
12/15	小売売上高(前年比)	10月	3.2%	2.7%	4.3%
12/17	非石油輸出(前年比)	11月	1.5%	-3.3%	0.0%
12/23	CPI(前年比)	11月	-0.7%	-0.8%	-0.8%
12/24	鉱工業生産(前年比)	11月	-3.0%	-5.5%	-5.4%

(資料) ブルームバーク

タイパーツ相場

予想レンジ: USD/THB 35.80 ~ 36.80
THB/JPY 3.25 ~ 3.43

バンコック資金室 山口 朋子

■ 先月の為替相場

● 米国の利上げを受けドル/パーツは上昇

月初、ドル/パーツは35.82パーツで取引を開始。2日の海外時間にイエレンFRB議長が年内の利上げに関して前向きな発言をしたことを背景にドル買いが活発化すると、3日にかけて35.92パーツまで上昇。4日に発表された米11月雇用統計において、非農業部門雇用者数が21.1万人増(市場予想20.0万人)と良好な内容だったことから直後はドル買い優勢な展開となるものの、36パーツ手前では上値を抑えられ、利益確定のドル売りフローが入り、一気に35.735パーツまで反落し、月安値を付けた。

週明け7日は、タイが休日となる中、米利上げ期待を背景にドル買い優勢となりドル/パーツも再び35.90パーツ近辺まで上昇。その後も、中国の人民元が4年半ぶりの安値を更新し、またアジア株が全面安となる中、アジア通貨売りの流れから、ドル/パーツは36.10パーツ台まで上昇した。ただし、15日に原油先物の値下がりが一服したことを背景にリスク回避の流れが弱まると、アジア通貨は全般に上昇基調となり、ドル/パーツも35.88パーツまで反落。16日に開催されたタイ中銀の金融政策決定委員会では政策金利が据置かれ、予想通りの結果だったことで為替相場への影響は限定的となった。その後注目された米FOMCでは、事前予想通り0.25%の利上げが発表されると、直後はドル買いの流れとなり、ドル/パーツは一時36.19パーツまで上昇した。ただし、利益確定のドル売りが入ると、パーツは買い戻される展開となり、一気に35パーツ台まで値を下げた。

月末にかけては再びパーツ安の展開となった。18日には、原油相場下落、米国株下落となったことで、リスク回避の動きが強まると、ドル/パーツは一時36.20パーツと月高値を付けた。22日に、タイSET指数は海外投資家らの売りを受け、終値ベースで約2年ぶりの安値を付けると、パーツ安の流れも継続した。その後はクリスマス、年末休暇を前に売買は控えられると、ドル/パーツは36パーツ近辺での推移が続いた。

■ 今月の見通し

● ドル/パーツは底堅い推移を予想する

2015年はパーツ安の年となった。経済刺激効果を期待しタイ中銀は2会合連続で利下げを実施し、さらに政府・中銀によるパーツ安誘導策の発表などもあり、アジア通貨の中で高い下落率を記録した。2016年についてはソムキット副首相は「緊急経済対策による大規模な財政出動が景気回復をけん引する」と指摘しており、国内総生産(GDP)成長率は前年比+3.5%~+4.0%に達するとの見通しを明らかにしている。景気回復が確認されれば、タイ中銀によるパーツ安誘導は和らぎ、ドル/パーツに調整が入ると予想される。ただし、泰米の金融政策の違い、原油価格の下落を受けたリスクオフモードが今後も継続すると予想され、ドル/パーツが大きく下落するとは考えにくい。

12月16日に開催された、米FOMCでは市場の予想通りFFターゲットレートを25bp引き上げ0.25~0.50%とした。FOMCメンバーによる金利見通しは2016年末までに計1%の利上げを見込んでいる点は前回の見通しと変わらずであったが、2017、2018年末の見通しは前回より若干低下した。1月以降も引き続き米国雇用、インフレなどの経済指標を眺めながら追加利上げの思惑で相場は上下することになるだろう。

一方、16日にタイ中銀は政策金利を年1.50%で据え置くことを決定した。声明文では、タイ経済は大型の財政支出、生活必需品に対する消費拡大、観光客の増加などにより、2015年第3四半期から緩やかに回復しているとの認識が示された。世界的な経済減速に伴うタイ経済への影響を注視しているとしながらも、悲観的なトーンにはなっていない。12月末に発表された経済指標でも景気の緩やかな改善は確認されたものの、輸出の低迷は続いている。タイ中銀は2016年の輸出成長率は0%に下方修正しており、タイの輸出も今年は回復が難しいとみている。そのため、中銀は当面政策金利を低位で維持すると予想され、ドル/パーツは引き続き底堅く推移する可能性が高い。

また、タイに取って非常に重要な中国についても、景気低迷の中、人民元安による輸出拡大を狙ってることが想定される。ドル/人民元の動きにつられ、アジア通貨も売られやすい環境は継続すると予想される。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』

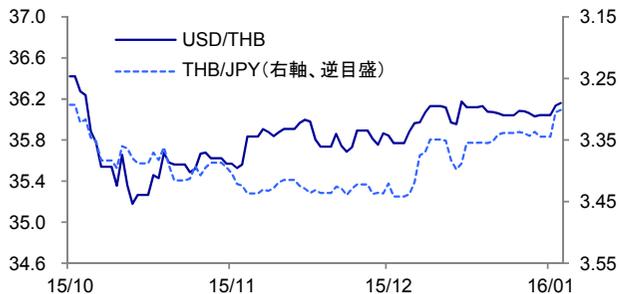
日本のサラリーマンは朝ごはんを食べない、もしくは簡単に済ませてしまう方が多いと思いますが、タイでは朝ごはんは非常に重要な食事であり、朝食を抜く方は少ないです。また、夕のサラリーマンの多くは朝ごはんを家ではなく会社で食べております。自宅から持参するか、出社前に屋台で買うという人が多いのです。

人気の朝ごはんは『ジョーク』というタイ版のお粥です。日本のお粥と違ってお米を粉々につぶしたものをチキンスープでじっくり炊いたトロトロのお粥です。また、これだけでは物足りず『カオラートゲーン』という、日本でいう『お惣菜屋』で出来合いの料理を何品か買って一緒に食べることもあります。

ディーリングルームは朝が早いので、朝食を机で食べるスタッフが多いです。ジョークなどを静かに食べてくればいいのですが、タイ人らしく朝から強烈な匂いのする惣菜とセットで買ってくる子が多く、派遣員はその匂いを嗅ぐだけで昼間までお腹がいっぱいになってしまっています。

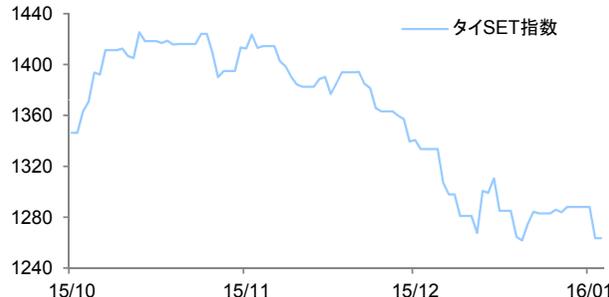
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	CPI (前年比)	11月	-0.68%	-0.97%	-0.77%
12/3	消費者景気信頼感	11月	-	74.6	73.4
12/16	金融政策決定会合		1.50%	1.50%	1.50%
12/28	通関輸出(前年比)	11月	-5.00%	-7.42%	-8.11%
12/28	通関輸入(前年比)	11月	-14.50%	-9.53%	-18.21%
12/28	通関貿易収支(USD)	11月	\$1766M	\$299M	\$2101M
12/29	製造業生産指数	11月	-2.00%	0.10%	-0.80%
12/30	経常収支	11月	\$4338M	\$2997M	\$5178M

マレーシアリング相場

予想レンジ: USD/MYR 4.15 ~ 4.48
MYR/JPY 27.40 ~ 28.90

シンガポール資金部 松下 哲史

■ 先月の為替相場

マレーシアリングは、1日に4.25台後半でオープン。同日に発表されたマレーシア11月製造業PMIは過去最低となる47.0となったものの反応は限定的となった。週半ばにかけて、週末のOPECで減産が見送られるとの見方から原油価格が急落、マレーシアリングは連れて4.25台まで売られる。しかしECB理事会を終えてドル売りが強まるとマレーシアリングは一時4.18台まで買い戻され、結局4.20台でクローズした。

7日、4.22台でオープン。マレーシア中銀が公表した11月末時点での外貨準備は前回公表時から小幅に増加。前週末のOPEC総会において原油減産は見送られ、生産目標も決定されなかったことで原油先安観が強まり、原油価格は下落、マレーシアリングも連れ安となり、4.27台まで売られる。10日に発表されたマレーシア10月鉱工業生産は前年比+4.2%となり市場予想を小幅に下回るも反応は限定的だった。結局4.27台後半でクローズした。

14日、4.30近辺でオープン。原油価格が35ドルを割り込み下落する展開に4.33台まで売られるも、その後原油価格が反発すると15日にかけて4.29台まで買い戻される。注目された米国FOMCでは事前予想通りに利上げが決定されるも、政策金利見通しが据え置かれたことで17日にはドル買いが強まる場面も見られたが、その動きも長くは続かず、週後半には米金利の低下とともにドル売りが優勢となると4.28台までリングは買われた。

■ 今月の見通し

先月のマレーシアリングは、米国FOMC、OPEC総会などの重要イベントを通過し、ややリング安が進んだ。

まず、外部環境だが、米国の利上げは事前予想通り、0.25%の利上げが決定。声明文や会見の内容を勘案すると、今後も引き続き、政策金利は緩やかに引上げていくことが想定されるも、主要通貨に対するドルの値動きを示すドルインデックスは、年初から10%弱上昇しており、一旦は、利益確定・ポジション調整のドル売りが優勢になり、リングは買い戻しやすい状態となるかと思われる。

一方で、原油相場については、先月初のOPEC総会で原油減産に加え生産高設定が見送られたことで、軟調な推移が継続。マレーシア政府は、2016年度予算案にて原油価格を48ドル/バレルと想定するも、原油価格が現状の相場水準を維持する場合には、将来的な歳入減少の可能性なども視野に入れる必要があろう。

しかし、マレーシアのファンダメンタルズに目を向けると、10月の貿易収支が4年ぶりの高水準となるなど、電子機器類の堅調な輸出を背景に、資源依存型からの着実な脱却が進んでいる。また、政府系投資会社1MDBについても、中国国有企業への資産売却を合意するなど、リング相場にとっては安心材料となる。

引き続き、原油価格の動向には注意を払う必要があるも、足元、リングのリスク感応度は下がっており、今月のリング相場は、リング安方向に調整した現状レベルでの横ばい推移をメインシナリオと考えられる。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』
何かにつけてご当地ネタでマレーシアを紹介すると、他民族国家故に〇〇系ではxx、△△系では□□、のようになってしまう、一言でこれ!とすっきりいかないのですが、朝食を語る上でもほぼ同じことが言えるかと思えます。だいたいホテルでは朝食のビュッフェでは「ナシレマ」(マレー系)、「ロティチャイナ」(インド系)、「中華系の麺、点心」(中華系)、「アメリカン」(所謂サラダとかベーコンとかの良く見る料理系)をほぼ見掛けます。ただ、ここだけは国民朝食の地位をしっかりと固めて民族関係なく食べられていると思われるのが、ナシレマです。実際に当拠点のナショナルスタッフも始業前のキャンティーンでテイクアウェイしたつばいナシレマを食べているのを見かけます。「ナシレマってなんだよ」とお思いの方もおられると思いますので、簡単に説明をしますとココナッツミルクで炊いたご飯に揚げた煮干し、きゅうり、ゆで卵が添えられており、その上に激辛サンバルソースがかかったものです。私も朝食をゴルフ場で食べる際は、一時期はナシレマを無条件に食べていましたが、「辛いご飯を大量に口に頬張る→喉が渇く→水分を大量に摂取→朝から腹十分(→時々ブレー中に腹痛)→スコアが崩れる」という負のスパイラルに陥りやすい体質の為(しかもこの時に「テタレ」という激甘ミルクティーを飲むとその確率が急上昇)、だいぶ疎遠になってしまいました。尚、このナシレマは昔は朝食の代名詞的存在であったそうですが、今では1日中いつでもどこでも食べることができず。ローカルレストランに行けば2リング前後というかなりリーズナブルなお値段ですのでご興味ある方はマレーシアに来られた際には是非お試しください!

(マレーシアみずほ 山田)

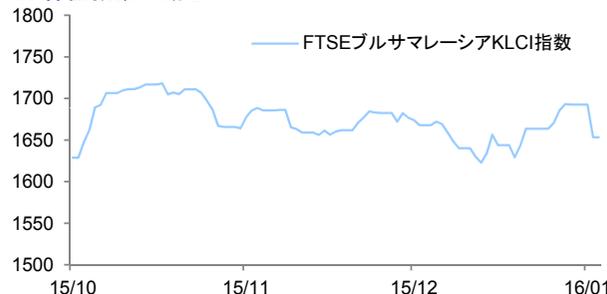
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/4	輸出 (前年比)	10月	8.4%	16.7%	8.8%
12/4	輸入 (前年比)	10月	-3.2%	-0.4%	9.6%
12/4	貿易収支 (MYR)	10月	9.00B	12.16B	9.69B
12/10	鉱工業生産 (前年比)	10月	4.8%	4.2%	5.1%
12/15	外貨準備高	12月	-	94.9Bio	94.6Bio
12/23	CPI	11月	2.30%	2.60%	2.50%

(資料) ブルームバーク

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 13500 ~ 14000
 IDR/JPY 0.87 ~ 0.91
 JPY/IDR 110.00 ~ 115.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

インドネシアみずほ銀行 河合 良介
 アジア・オセアニア業務部 小泉 聡

■ 先月の為替相場

先月のルピア相場はやや値動きの荒い展開。中旬のFOMCまではルピア軟調推移となるも、FOMC後はルピアが反発した。

月初1日のドル/ルピアは13800付近でオープン。同日発表された11月消費者物価指数(CPI)が前年比+4.89%と今年初めて同+5%を下回ったが、米利上げ期待もあり、13800前後の揉み合いが継続。

その後、7日発表のインドネシア外貨準備高(11月末)が前月末比減少し、米11月雇用統計も予想を上回ったことからルピアは軟調推移となり、14日には14000台に上昇した。その後、FRBが事前予想通り利上げを決定すると、証券投資流入が堅調となり、13600台までルピアが反発している。

■ 今月の見通し

今月のルピアはやや堅調な展開も予想される。

今月はインドネシアに関する材料が乏しい中、先月のFOMCを無難に終えたことから、市場に安心感が広がり、証券投資流入が継続する可能性もありそうだ。

一方、原油安やコモディティ価格下落が継続すればルピア売り圧力となる。また、ルピア相場が堅調となれば、今月中旬に開催予定のインドネシア中銀定例会合において利下げが決定される可能性もあり、ルピアの上値は限定的となりそうだ。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

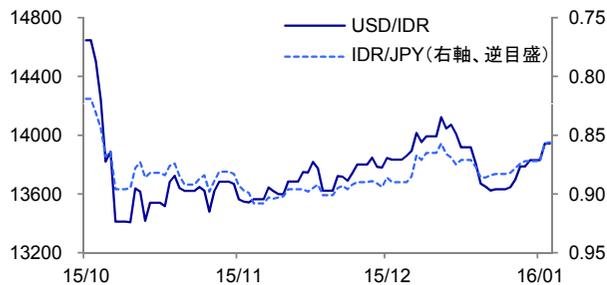
『当地の朝食事情』

ローカススタッフを見ていると、オフィスに着いた後に揚げパンのようなものを食べていたりしています。インドネシア料理全般に言えることですが、やや油っこいものが多く、朝食も油っこいものが多いような気がします。

私が朝食として好きなのは「ミーアヤム」です。ミー(麺)・アヤム(鶏肉)という名の通り、温かい汁に茹でた麺と、ややこってりした味付きの鶏肉が入っており、サッパリしていることから、日本人にも人気の朝食だと思います。早朝にゴルフ場に行くと朝食を頼む場面となると、皆こぞってミーアヤムを頼みます。やはり、日本人好みのテイストなのでしょう。

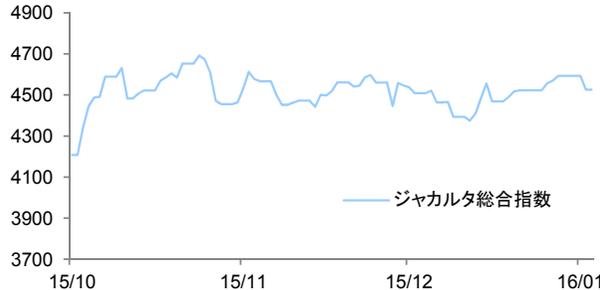
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	CPI(前年同月比)	11月	4.85%	4.89%	6.25%
12/7	外貨準備高(USD B)	11月	-	100.24	100.70
12/15	貿易収支(USD M)	11月	900	-346	1,019
12/17	インドネシア中銀政策金利	12月	7.50%	7.50%	7.50%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 46.50 ~ 47.50
 PHP/JPY 2.50 ~ 2.60

マニラ支店 杉山 泰憲

■ 先月の為替相場

30日(月)が祝日だったためドルペソは1日(火)に47.15ペソで取引開始。米国の利上げ観測が強まる中、ドルが底堅く推移。但し上値も限定的でイエレンFRB議長は12月利上げ示唆発言があった翌日3日(木)でも47.20ペソまで。クリスマスシーズンで増加しているOFW(海外フィリピン人労働者)送金のドル売りがドルの上値を押さえる展開となった。ECBの追加緩和策が市場の期待を裏切ったとしてユーロが激しく買い戻された翌日の4日(金)は、ドルペソでもドル安となって47.02ペソまでつけるが、米11月雇用統計を控えドルが買い戻されて終値47.105ペソで越過となる。

7日(月)は47.09ペソで取引開始。前週発表の米11月雇用統計の強い内容を受けて、ドル買いセンチで始まる。8日(火)に発表された中国11月貿易統計の冴えない内容でリスクオフの雰囲気が強まる中、47.195ペソまでのドル高に。9日(水)は動意なしの展開となるが、同夜の原油価格の下落に端を発したリスクオフムードによって、翌10日(木)はドル買いとなって47.23ペソまで、11日(金)は47.26ペソまでのドル買い・ペソ安となって、47.235ペソで週の取引を終えている。

14日(月)は47.30ペソで取引開始。FOMCを控えドル堅調な展開で47.30ペソ台での推移の後、原油安などからのリスク回避的な雰囲気もドル買いを招き15日(火)には47.42ペソまで上昇。16日(水)はFOMCを控えてポジション調整の動きから47.30ペソ台での揉み合いに戻る。米国の利上げ決定となった翌日の17日(木)は朝方Sell On Factのドル売りから47.21ペソまでドル売りとなるも、引き続き商品市場の軟調ぶりからのリスク回避的なドル買いが優勢で徐々にドルが上昇し、47.395ペソまで上昇。翌18日(金)も47.49ペソまでのドル買いとなって47.34ペソで越過となっている。

クリスマスが近づくとつれて、市場参加者も少なくなり取引量も減少の一途をたどる展開となるが、週明け21日(月)は47.29ペソで取引開始。材料難の中、出会いも少なく47.25~47.35ペソ間の小幅な動きに終始。24日(木)からのクリスマス休暇を前に、23日(水)は47.23ペソで取引を終了。クリスマス明けの28日(月)、29日(火)は動意薄く47.10ペソ台での推移となっている。

■ 今月の見通し

ドルペソは12月の初めの取引レベルである47.10~20ペソで、16日の米国の利上げを既に十分織り込んでいるかのような印象であったが、FOMC直前の原油価格の下落から端を発したリスク回避スタンスの広がり、更なるドル買い・ペソ売りを招き47.40ペソまで上昇したところで約10年ぶりの米国利上げを迎えることになった。利上げ後に47.49ペソのドル高値をつけた後は、本格的なクリスマスシーズン入りとなったこともあって動意薄な展開。

フィリピン経済そのものは、7~9月期のGDP成長率が前年比+6.0%と個人消費をけん引役としてアジア域内でも高い成長率を維持しており、インフレ率も直近11月で前年比+1.1%と低インフレ・高成長を維持している。原油安も輸入物価を押し下げる効果が大きくフィリピン経済には大きなメリット。経済成長を支えるOFW送金は10月の伸びが前年比+0.2%と減速感があるものの、ショッピングモールの賑わい・振りを垣間見るに、足許のクリスマスシーズンに大量の資金がフィリピン国内に還流されていることが実感できる。

フィリピンの経済状況と米国の今後の利上げが緩やかなものになるとの見方から、来年はドルペソは緩やかにペソ高に動いていくものと考えたいところだが、来年5月の大統領選挙及び選挙後の経済運営の不透明さが積極的にペソ買いに動けない要因になっている。

現在大統領の有力候補は4名。

前副大統領のビナイ氏は、「ばら撒き」行政に低所得者層からの厚い期待があり地方を中心に地盤を固めていたところ。しかしミンダナオ島のダバオ元市長で治安維持・犯罪撲滅に実績を上げているドゥテルテ氏が大統領選挙に参戦。支持率調査で一躍首位に躍り出てくるなど、今や台風の目的な存在。ビナイ氏と低所得者層の票を二分してしまうとの見方もある。

元女優で上院議員のポー氏は、常に支持率調査で1位、2位につけている人気がありながら、被選挙資格を満たさないと選挙管理委員会から出馬資格を取り消され現在係争中。現職のアキノ大統領が「後継指名」をしたロハス氏はかなりの支持率が上がらず苦戦している状況。

直接選挙(はっきり言って人気投票)のため最後まで誰が勝つかわからない、また誰がなっても経済運営がどうなるか読めない、という状況からペソはなかなか強くなりきれない状況が続くそう。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』

日本でも「洋風」な朝食といえば、カリカリベーコンに、目玉焼きかオムレツが皿に盛られているのがイメージしやすい。

フィリピンの朝食でもベーコンは大変好まれていますが、その姿はカリカリのパラペラではなくて、棒状のブロックベーコン。3センチ四方程度の角切りの棒状で、長さが15~20センチぐらいあるのが一人前。しかも、それをご飯と食べるのがフィリピン風。朝から、油ギトギト、塩分バリの食事です。

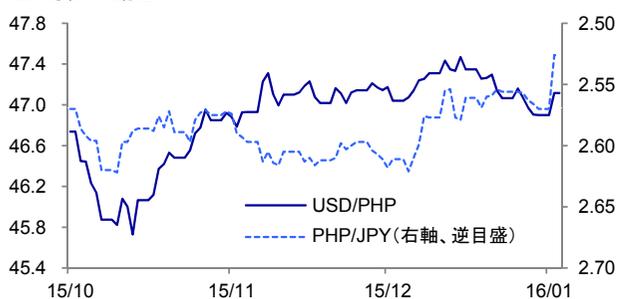
他にもコンビーフに玉ねぎ、ポテト、時にはトマトを入れて炒めたものとガーリックライスという組合せもポピュラーなのですが、こちらも負けずにオイル&ソルティ。あんなにコンビーフを大盛りにして食べるのは初めてみました。

フィリピン人は野菜、果物をあまり食べません。南国だから安くて種類豊富な果物がたくさんあるだろうに、と思いがちですが、ところが国内物流が貧弱でコストがべらぼうに高いという理由から、首都圏に住む多くのフィリピン人にとっては野菜・果物は高額の食材であるようです。

もっとも最近では、オイル&ソルティな食事を見直す健康志向も強まってきているようですが、かなりのコストをかける覚悟が必要だということなんです。

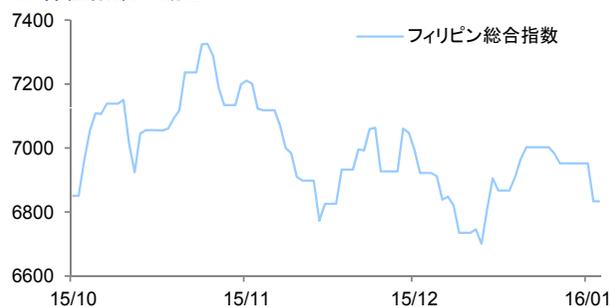
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/4	CPI (前年比)	11月	0.7%	1.1%	0.4%
12/7	外貨準備高	11月	-	806億 ^{ドル}	811億 ^{ドル}
12/10	輸出 (前年比)	10月	-3.3%	-10.8%	-15.5%
12/15	OFW送金 (前年比)	10月	4.3%	0.2%	4.3%
12/15	BSP 政策金利	-	-	4.0%	4.0%
12/18	総合国際収支 (USD)	11月	-	-141M	469M
12/29	輸入 (前年比)	10月	5.5%	16.8%	6.7%
12/29	貿易収支 (USD)	10月	-1355M	-1937M	-1316M

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 64.80 ~ 67.80
INR/JPY 1.78 ~ 1.87

シンガポール資金部 中野 博明

■ 先月の為替相場

12月のルピー相場は、前半は米国の利上げを控えてドル高ルピー安が進行し、23か月ぶりとなる安値まで到達。その後、16日の米国利上げ後は流れが反転し、ルピー高が継続した。

1日に発表された中国11月製造業PMIおよび印11月製造業PMIが前月を下回る結果となったことで、インドルピーは下落して取引を開始。2日のイエレンFRB議長の年内利上げに対する前向きなコメントによりドル高が進行したことに加え、3日には、前月を下回る印11月PMIサービス業、PMI総合指数が発表されたことで、インドルピー売りが加速した。1日に66中盤で取引を開始したドル/ルピーは67近辺まで上昇し、11月末につけた直近高値を更新、23か月ぶり高値(ルピー安値)まで上昇した。

4日、OPEC定例総会にて原油減産の合意が見送られたことを受け、翌週は原油価格が大幅に下落する展開となった。新興国通貨は揃って売りが先行したが、インドは原油輸入国であったことから、ルピーへの影響は限定的。ドル/ルピーは66台後半にて小動きの展開。11日夜間、中国外貨取引センターが新たな人民元指数を発表したとの報道に、更なる人民元安誘導が行われるのではないかと憶測からアジア通貨が対ドルで下落。ルピーも一時67を突破し、再度23か月ぶりルピー安値を付けた。

翌週15日以降は米FOMC前からポジション調整のドル売りが入り、ドル/ルピーは66後半まで下落。16日には、FOMCにて米利上げが決定され、利益確定のドル売りが入ると、以降はルピーが買い戻される展開が継続。ドル/ルピーは66割れ水準まで下落した。

■ 今月の見通し

2016年1月のルピー相場は、横ばい、あるいはややルピー安進行を予想する。

16日のFOMCにて米国は利上げを決定。その後は一貫してルピーが買い戻される展開が継続中である。中国への貿易依存度が低いことに加え、原油価格の下落がインド経済にとってサポートとなることから、他アジア通貨と比較するとルピーのパフォーマンスは良好である。

インド準備銀行(RBI)は1日に政策金利を予想通り据え置き。RBIは9月末の0.50%の利下げ時、声明文にて利下げは“front-loaded”(事前予防的)と表現していた。それ以降、インフレ率が反転し上昇していることを考えると、RBIが今後も利下げを積極的に実施していくとは考えにくく、当面の間は金利を据え置く可能性が高いと予想している。

経済指標に目を向けると、1か月遅れで出てくる鉱工業生産は予想を大きく上回ったものの、11月の数値をまとめたPMIは全て前月を下回る数値となり減速傾向が鮮明。11月中旬からタミル・ナドゥ州で発生している豪雨及び洪水による影響も今後懸念される。また、11月のインフレ率は、先月の前年比+5.0%から加速し同+5.4%と発表。食料品のインフレ率が加速しており、今後のインフレ率上昇の懸念は依然として存在。これまでインドのインフレ率は原油価格急落に押される形で下落していたものの、原油価格急落から1年超経て、前年比ベースで今後のインフレ率は原油価格急落の影響を受けづらくなる。年度末に向けてインフレ率は上昇が加速すると考えられている。

経済指標から見ると来年のインド経済は短期的にはインフレ率上昇及び製造業不振が懸念され、一時的にルピー安が進行すると予想。

一方、米金利/経済見通しについては、継続的な利上げは難しいと考えており、来年は米経済腰折れ懸念からの利上げペース減速を予想。徐々にドル高に修正が入り、インドルピーが再び上昇する展開を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の朝食事情』

朝食しっかり食べる派の筆者にとって、毎朝の食事は重要課題。さてきょうは何を食べようかな。

まずはマハラシトラ州の定番朝食、郷土料理のポハ。これはお米を平らにつぶして乾燥、フレーク状にしたものを水で軽く戻し、マサラとチリを入れて、玉ねぎやジャガイモ等と炒めたもの。油をあまり使わないので健康的な朝食だ。自分でも簡単に調理できるが、朝は時間がないから屋台や立ち食い食堂で買う。価格も10~12ルピー(18~22円)と手ごろだ。シーラと呼ばれるセモリナ粉をギー(バターオイル)と砂糖、ミルクを加えてよく弱火で熱しながらよく混ぜ、干しブドウなどを加えたスイーツ。これと半々にしたシーラ・ポハもいい。

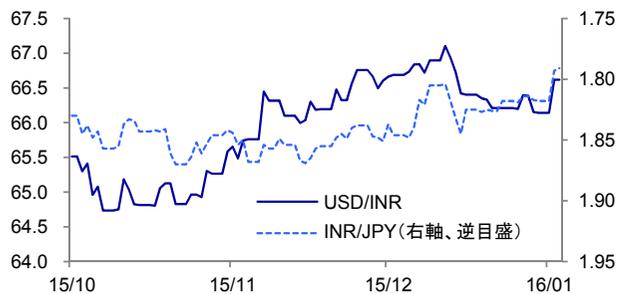
次はワダパオ、茹でたジャガイモを潰してチリや玉ねぎを炒めたものと混ぜ、丸いコロッケ(衣はフリッター)を揚げる。それをチャツネをつけた四角いパンの間に挟む。日本のコロッケパンのようなものだ。辛いチャツネを除けば、辛さの苦手な日本人にも親しみがわく味わいだ。これと同じパンにバコラ(ヒヨコマメ粉を衣にした野菜のてんぷら)を挟めばバジパオ。ジャガイモ、玉ねぎそれにホウレンソウの天ぷらを挟んだミックスが最高。

3番目はサブダナ、水で戻した大き目のタピオカをチリ、クミンと炒める。ヒンズー教徒の断食の時の定番食。結構重い食事だから、食べ過ぎると苦しい。これを丸くまとめてあげたサブダナワダは、ココナツベースのディップにつけて食べる。サブダナはちょっと高め。とはいっても15-30ルピー(27-54円)ぐらい。

その他の朝食定番はインド南部が発祥のイドリーやドーサ。米粉を水で溶いて軽く発酵させた生地を蒸すとイドリー、薄く延ばして丸い鉄板で焼くとドーサ。どちらもココナツベースなどのディップをつけていただく。あとは、サンドウィッチ、チャパティ、プリにドクラと、まだまだインド朝ごはんオプションはいろいろある。

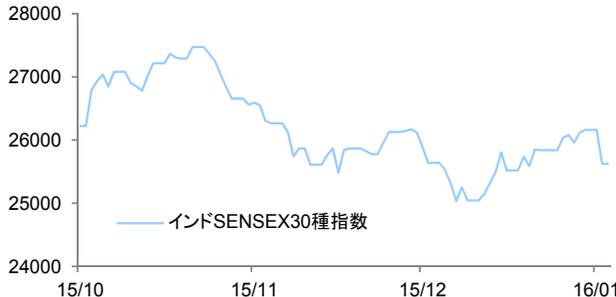
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

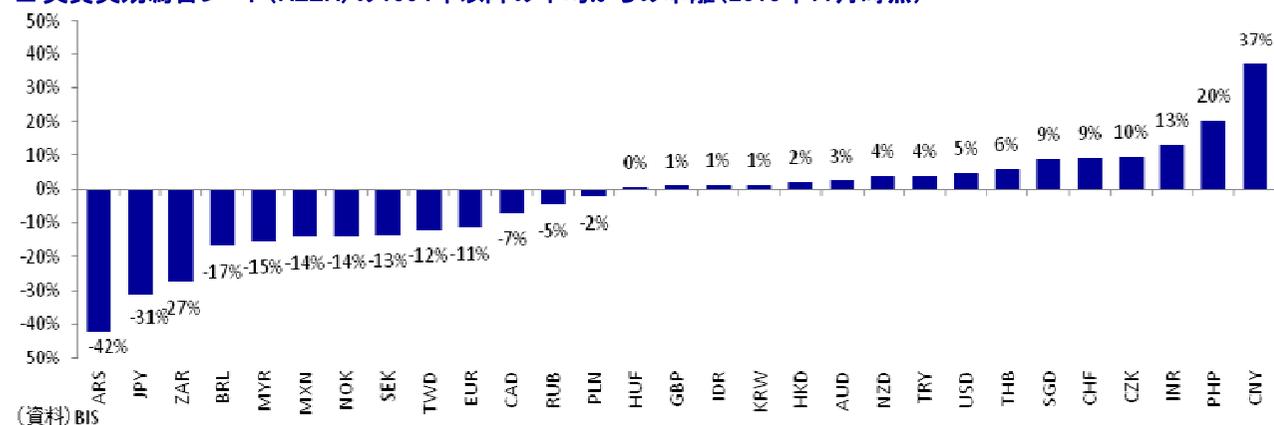
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	日経インドPMI製造業	11月	-	50.3	50.7
12/1	政策金利	-	6.75%	6.75%	6.75%
12/3	日経インドPMIサービス業	11月	-	50.1	53.2
12/3	日経インドPMIコンポジット	11月	-	50.2	52.6
12/11	鉱工業生産(前年比)	10月	7.60%	9.80%	3.80%
12/14	消費者物価指数(前年比)	11月	5.30%	5.41%	5.00%
12/14	卸売物価(前年比)	11月	-2.47%	-1.99%	-3.81%
12/15	輸出(前年比)	11月	-	-24.4%	-17.5%
12/15	輸入(前年比)	11月	-	-30.3%	-21.1%

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2014年末	2015年12月末	騰落率	株式市場	2014年末	2015年12月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	17823.07	17425.03	-2.2%	-
日本	USD/JPY	119.78	120.22	0.4%	日経平均株価	17450.77	19033.71	9.1%	8.7%
ユーロ圏	EUR/USD	1.2098	1.0862	-10.2%	ドイツDAX指数	9805.55	10743.01	9.6%	9.6%
英国	GBP/USD	1.5577	1.4736	-5.4%	ロンドンFTSE100指数	6566.09	6242.32	-4.9%	0.5%
豪州	AUD/USD	0.8175	0.7286	-10.9%	S&P/ASX200指数	5411.018	5295.9	-2.1%	9.8%
カナダ	USD/CAD	1.1621	1.3839	19.1%	S&Pトロント総合指数	14632.44	13009.95	-11.1%	-25.3%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.2055	6.4937	4.6%	上海総合	3234.677	3539.182	9.4%	4.6%
香港	USD/HKD	7.7551	7.7507	-0.1%	香港ハンセン	23605.04	21914.4	-7.2%	-7.1%
インド	USD/INR	63.0437	66.1537	4.9%	インドSENSEX30種	27499.42	26117.54	-5.0%	-9.5%
インドネシア	USD/IDR	12388	13788	11.3%	ジャカルタ総合	5226.947	4593.008	-12.1%	-21.1%
韓国	USD/KRW	1090.98	1175.06	7.7%	韓国総合株価	1915.59	1961.31	2.4%	-4.9%
マレーシア	USD/MYR	3.4973	4.2943	22.8%	ブルサマレーシアKLCI	1761.25	1692.51	-3.9%	-21.7%
フィリピン	USD/PHP	44.72	46.905	4.9%	フィリピン総合	7230.57	6952.08	-3.9%	-8.3%
シンガポール	USD/SGD	1.3255	1.4185	7.0%	シンガポールST	3365.15	2882.73	-14.3%	-20.0%
台湾	USD/TWD	31.656	32.862	3.8%	台湾加権	9307.26	8338.06	-10.4%	-13.7%
タイ	USD/THB	32.91	36.03	9.5%	タイSET	1497.67	1288.02	-14.0%	-21.4%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2015年11月時点)



■ 実質GDP成長率

	2014Q3	2014Q4	2015Q1	2015Q2	2015Q3	2015Q4	2013	2014
	(前年比%、*前期比年率%)						(前年比%)	
先進国								
米国*	4.3	2.1	0.6	3.9	2.0		1.5	2.4
日本*	-2.8	1.8	4.4	-0.5	1.0		1.4	0.0
ユーロ圏	0.8	0.9	1.3	1.6	1.6		-0.3	0.9
英国	2.8	2.8	2.5	2.3	2.1		2.2	2.9
豪州	2.5	2.2	2.1	1.9	2.5		2.1	2.6
カナダ*	2.1	3.4	-0.7	-0.3	2.4		2.2	2.5
エマージングアジア								
中国	7.2	7.2	7.0	7.0	6.9		7.7	7.3
香港	2.9	2.4	2.4	2.8	2.3		3.1	2.5
インド	8.4	6.6	7.5	7.0	7.4		5.1	6.9
インドネシア	4.9	5.0	4.7	4.7	4.7		5.6	5.0
韓国	3.3	2.7	2.5	2.2	2.7		2.9	3.3
マレーシア	5.6	5.7	5.6	4.9	4.7		4.7	6.0
フィリピン	5.5	6.6	5.0	5.8	6.0		7.1	6.1
シンガポール	2.8	2.1	2.7	2.0	1.8	2.0	4.4	3.0
台湾	4.3	3.6	4.0	0.6	-0.6		2.2	3.7
タイ	1.0	2.1	3.0	2.8	2.9		2.9	0.9

(注) インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	15/05	15/06	15/07	15/08	15/09	15/10	15/11	2013	2014
	(%)							(%)	
先進国									
米国	5.5	5.3	5.3	5.1	5.1	5.0	5.0	7.4	6.2
日本	3.3	3.4	3.3	3.4	3.4	3.1	3.3	4.0	3.6
ユーロ圏	11.0	11.0	10.9	10.8	10.8	10.7		12.0	11.6
英国	5.6	5.6	5.5	5.4	5.3	5.2		7.6	6.3
豪州	5.9	6.0	6.3	6.2	6.2	5.9	5.8	5.7	6.1
カナダ	6.8	6.8	6.8	7.0	7.1	7.0	7.1	7.1	6.9
エマージングアジア									
中国		4.0			4.1			4.1	4.1
香港	3.2	3.2	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.4	3.2
インドネシア				6.2				6.0	5.8
韓国	3.9	3.9	3.7	3.6	3.5	3.4	3.4	3.1	3.5
マレーシア	3.1	3.1	3.2	3.2	3.2	3.1		3.1	2.9
フィリピン			6.5			5.6		7.1	6.8
シンガポール		2.0			2.0			1.9	2.0
台湾	3.8	3.8	3.7	3.7	3.8	3.8	3.8	4.2	4.0
タイ	0.9	0.8	1.0	1.0	0.8	0.9	0.9	0.7	0.8

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	15/06	15/07	15/08	15/09	15/10	15/11	15/12	2013	2014
	(前年比%)							(前年比%)	
先進国									
米国	0.1	0.2	0.2	0.0	0.2	0.5		1.5	1.6
日本	0.4	0.2	0.2	0.0	0.3	0.3		0.4	2.7
ユーロ圏	0.2	0.2	0.1	-0.1	0.1	0.2		1.3	0.4
英国	0.0	0.1	0.0	-0.1	-0.1	0.1		2.6	1.5
豪州	1.5			1.5				2.5	2.5
カナダ	1.0	1.3	1.3	1.0	1.0	1.4		0.9	1.9
エマージングアジア									
中国	1.4	1.6	2.0	1.6	1.3	1.5		2.6	2.0
香港	3.1	2.5	2.4	2.0	2.4	2.4		4.3	4.4
インド	10.0	10.5	10.8	11.5	9.5	8.6	7.9	10.9	6.4
インドネシア	7.3	7.3	7.2	6.8	6.3	4.9		6.4	6.4
韓国	0.7	0.7	0.7	0.6	0.9	1.0	1.3	1.3	1.3
マレーシア	2.5	3.3	3.1	2.6	2.5	2.6		2.1	3.2
フィリピン	1.2	0.8	0.6	0.4	0.4	1.1		3.0	4.1
シンガポール	-0.3	-0.4	-0.8	-0.6	-0.8	-0.8		2.4	1.0
台湾	-0.6	-0.6	-0.4	0.3	0.3	0.5		0.8	1.2
タイ	-1.1	-1.1	-1.2	-1.1	-0.8	-1.0		2.2	1.9

(注) 豪州は四半期データ。インドの年間CPI上昇率は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2014Q1	2014Q2	2014Q3	2014Q4	2015Q1	2015Q2	2015Q3	2013	2014
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.2	-2.1	-2.1	-2.2	-2.3	-2.4	-2.5	-2.3	-2.3
日本	0.3	-0.1	-0.1	0.5	1.6	2.3	3.0	0.8	0.5
ユーロ圏	2.1	2.0	2.3	2.4	2.6	2.9	2.9	2.0	2.4
英国	-4.6	-4.8	-5.0	-5.1	-5.2	-5.1	-4.7	-4.5	-5.1
豪州	-2.4	-3.6	-3.3	-2.9	-3.3	-4.7	0.0	-3.5	-3.1
カナダ	-2.7	-2.5	-2.3	-2.3	-2.7	-3.0	-3.4	-3.2	-2.3
エマージングアジア									
中国	1.2	1.5	1.8	2.1	2.8	2.7	2.6	1.6	2.1
香港	1.6	2.1	1.5	1.2	1.2	2.5	3.1	1.5	1.2
インド	-1.7	-1.0	-1.2	-1.4	-1.3	-1.2	-1.1	-2.6	-1.4
インドネシア	-3.2	-3.2	-3.0	-3.1	-3.1	-2.5	-2.2	-3.3	-3.1
韓国	6.3	6.2	6.1	6.3	6.9	7.3	7.8	6.2	6.3
マレーシア	4.5	5.7	5.3	4.4	3.5	2.7	2.5	3.9	4.4
フィリピン	3.1	3.1	3.6	3.8	4.2	4.1	3.3	4.2	3.8
シンガポール	18.3	17.9	18.5	19.1	22.0	23.2	23.4	17.9	19.1
台湾	11.6	11.9	11.9	12.5	13.6	13.7	14.7	10.8	12.5
タイ	1.1	2.6	2.2	3.8	4.5	6.0	8.1	-1.1	3.8

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向		
			日付	水準 (%)	日付	(単位:bp)	日付	決定事項	
先進国									
米国	FFレート誘導目標	0.25 - 0.50	緩和: 2007/9/17	5.25	2008/12/16	-75-100	2015/12/16	+25bp	
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2015/12/18	現状維持	
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.05	緩和: 2011/11/3	1.50	2014/6/5	-10	2015/12/3	現状維持	
英国	バンク・レート	0.50	緩和: 2007/12/6	5.75	2009/3/5	-50	2015/12/10	現状維持	
豪州	キャッシュ・レート	2.00	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/2/3	-25	2015/12/1	現状維持	
カナダ	翌日物金利	0.50	緩和: 2015/7/15	1.00	2015/1/22	-25	2015/12/3	現状維持	
エマージングアジア									
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp	
インド	翌日物レポ金利	6.75	緩和: 2015/1/15	8.00	2015/9/29	-50	2015/12/1	現状維持	
インドネシア	翌日物金利	7.50	緩和: 2015/2/17	7.75	2015/2/17	-25	2015/12/17	現状維持	
韓国	7日物レポ金利	1.50	緩和: 2012/7/12	3.00	2015/6/11	-25	2015/12/10	現状維持	
マレーシア	翌日物金利	3.25	引き締め: 2010/3/4	2.00	2014/7/10	+25	2015/11/5	現状維持	
フィリピン	翌日物金利	4.00	引き締め: 2014/7/31	3.50	2014/9/11	+25	2015/12/17	現状維持	
タイ	翌日物レポ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2015/12/16	現状維持	
ベトナム	リファイナンス金利	6.50	緩和: 2012/3/12	15.00	2014/3/17	-50	2014/12/23	現状維持	

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行